

防災学習 実践事例集

特別支援学校編

がっこう
応援便り
号外

2019
秋



2019年9月発行 発行人 高比良美穂 発行所 社会応援ネットワーク 頒布価格 2000円
防災学習実践事例集 特別支援学校編



問い合わせ先

「防災学習実践事例集 特別支援学校編」についてのお問い合わせは、以下にお願いいたします。

一般社団法人社会応援ネットワーク
防災教育推進プロジェクト担当

メール bousai@shakai-ouen.com

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町1-12-11-3407

Tel 03-6861-3739 FAX 03-5645-2844

ホームページ <https://shakai-ouen.com/>

協賛

あんしん むすぶ
教職員共済

よろこびがつなぐ世界へ



JTU 日本教職員組合



中央ろうきん社会貢献基金

企画・編集・発行

社会応援
ネットワーク



事例1 知的障害のある子どもの防災学習 千葉県立長生特別支援学校
防災学習インタビュー 瀧川 猛さん

8 3

事例2 車いすの視点からの防災学習 埼玉県立日高特別支援学校
防災学習トピックス

14 9

事例3 視覚障害のある子どもと大人の防災学習 香川県立盲学校
防災学習トピックス 花崎哲司さん

20 15

事例4 聴覚障害のある子どもの防災学習 東京都立立川ろう学校
防災学習インタビュー 加藤紀彦さん 草間みどりさん

24 21

情報ファイル 防災学習の理解を深めるためのWebサイト

26

特別インタビュー あかはなそえじ先生からメッセージ
だれもが「助けて」といえる社会のために——院内学級の現場から
昭和大学病院内担当 副島賢和さん

27

情報ファイル 防災学習の理解を深めるためのブックセレクション

32

身の回りにあるものを災害時に役立てよう
福祉避難所Q&A
ストレスマネジメントQ&A

44 40 33

防災学習インタビュー 湯井恵美子さん
特別インタビュー 一ノ瀬メイさん
編集室から

48 49 51



事例1

知的障害のある子どもの防災学習

千葉県立
長生特別支援学校
(千葉県長生郡一宮町)

Data

〒299-4303
千葉県長生郡一宮町東浪見6767-7
児童生徒数：71名
教職員数：89名
(2019年5月1日現在)

事例 1

日常生活に引きつけて 具体的なことから考える

「障害がある子どもは大人が守ってあげなければ」。こうした考えの下、特別支援学校での防災教育はなかなか進まず、防災・安全体制の整備にとどまっている例は少なくない。障害児の防災教育を牽引してきた瀧川猛さんが教頭を務める、千葉県立長生特別支援学校(当時。現在市原特別支援学校教頭)での実践を取材し、お話を伺った。

千葉県立長生特別支援学校(千葉県長生郡一宮町)は、太平洋に通じる海のすぐ近くにある。津波が心配される立地の影響もあり、教職員の危機意識も高く、日常的に数多く避難訓練を行っている。東日本大震災後からは、体育館に移動する時などに児童生徒がヘルメットを持ち歩くようになり、それは今でも自主的な習慣として続いているそうだ。

取材時、学校に在籍する児童生徒は約70人。避難訓練では2台のスクールバスを使って高台まで移動する。重度重複障害でバスに乗れない10人程の子どもたちは、教職員の車に乗って避難することになっている。「訓練をしても、教室からスクールバスまでの避難は早いし、そこでぐずぐずしたりする子はいません。大人の



1 太平洋沿いに立地する長生特別支援学校は屋上から海がすぐ近くに見える。



危機感が伝わっているのだと思います」と、瀧川猛教頭は言う。

避難訓練と合わせ、中学部普通学級3年生(クラス人数は5人、知的障害があるが生活面では全員がほぼ自立している)の総合的な学習の時間の中で、「防災・災害」について取り組んでいる。前期はグループワークを中心に、火

学習内容	
第1回	導入 適切な避難の仕方について考えよう
第2回	インタビューをしよう①—インタビュー内容を考えよう—
第3回	インタビューをしよう②—インタビューをしよう—
第4回	インタビューをしよう③—インタビューしたことをまとめよう—
第5回	インタビューをしよう④—インタビューしたことを発表しよう—
第6回	安全な場所危険な場所を探そう①
第7回	安全な場所危険な場所を探そう②
第8回	報告会

表
「地震から命を守る—安全な場所、危険な場所を探そう」
中学部3年
総合的な学習の
時間カリキュラム
(全8時間)

予定、今回はこのうちの3時間目、インタビューの様子を見学した。

この時間までに、生徒たちは前期に調べたことなども参考にしながら地震発生時の避難行動をどのようにしたらよいかを皆で考え、インタビュー内容を事前に作成し、練習を行っている。インタビューに答える瀧川教頭は、オリジナルの教材として漫才師COWCOW(吉本興業)の「あたりまえ体操」の替え歌「あたりまえ防災」の映像を作成するなど、特別支援学校の防災教育を牽引してきた。「地域の人に話を聞きに行く、ということも提案したのですが、教頭先生が防災教育を熱心に行っているから、聞きに行こ

うとなったようです」と笑う。会議室に長机・椅子を用意し、正面には黒板とモニター。生徒が横一列に座り、授業が始まった。

地震が起きたら どうなるの? 被害状況は映像と解説で

5人の生徒が、一人ひとりずつ質問をしていく形式で授業が進められた。生徒はそれぞれ、質問事項をメモした紙を持ち、それを読み上げる。瀧川教頭には事前に内容が知らされており、それに合わせた映像などを準備していた。

生徒A「地震が起きて、考えられる被害はなんですか」
瀧川教頭「この地域は津波も



3 補助員の補助を受けながら学んだことをワークシートに書き込む。4 要所要所で動画や画像を用いながら授業が進行。

くるのですが、今から見せるものは、首都直下地震のシミュレーション、予想される被害の映像です。首都直下の地震がきた場合に街がどうなるのか、それを予想して作ったものです」

映像は2分程。流れる最中に逐一解説を入れる。「ある日、冬の東京です。壁が落ちていきます。火事です。土砂崩れ。お家に帰れなくなる人もいます」。映像が終わってから、地震が起きたらこうなるんだ、と印象に残ったところを生徒がノートに書いていこうとするが、なかなか進まない。そこで、再度映像を流すと、「ガラスが割れている」「電車！」など、反応が大きくなる。「地震といっても、学校にいる時だけじゃないからね。Aさんは自分で通学してるんだよね、その途中で地震が起こることもあるね」と、自分の生活と合わせて考えられるよう声かけをしていく。

地震が起きたら まず何をすればいい? 実際に動いてみせる

生徒B「地震が起きたらまず何をすればいいですか。すぐ

に外に逃げていいですか」

ここで瀧川教頭が「あたりまえ防災」の映像を流した。♪地震の時は、だんごむし♪忘れちゃいけない、頭を守るの歌詞に合わせて、小さくなっ

首都直下地震のシミュレーション映像を熱心に見つめる子どもたち。



て、両手で頭を守る姿勢をとる。みんな一度やってみて、でも「絶対どこでもだんごむし、ではないんです」と解説を入れる。「揺れに備えて姿勢を低くする、ということが大事です。担任の佐藤先生がこの机の上に立っている時に机を揺らしたら、怖いから多分姿勢が低くなります。やってみる？」側にいた担任の佐藤先生が上靴を脱ぎ、机の上に乗って立ち上がると、他の先生たちが机の両側を持ってガタガタと揺らした。慌ててしゃがみこむ佐藤先生。見ている生徒たちは楽しそう

だ。「こんなふうに、揺れると立っているのは難しいから、小さくなってふんばるんですね。だんごむしというのは、丸くなればいいんじゃないかと、低くなるんです。低くなる、頭を守る、じつとして、揺れがおさまるまでは、この3つが大事なことです」

生徒C「地震の時は、どこに隠れたらいいですか」

この質問に対しては、間髪を入れずに「今からこの部屋で地震が3秒後におきます。

みんな避難してね。3、2、

1！地震だ！まだ揺れてる、まだ揺れてる！」と、机を揺らした。生徒たちは、机の下にもぐりこむ。その様子を見て「机ごと揺れちゃうから、

ちゃんと机の脚を持っているのはいいですね」とコメント。

「今はたまたま教室だったか



5 自作のパワーポイント教材を使いながら、身振り手振りを交えて説明する瀧川先生。
6 「地震だ」の声に、机の脚をしっかりと押さえながらすぐさま机の下にもぐる子どもたち。

きた答えは「アイスクリーム」。瀧川教頭は「僕はアイスがあれば大丈夫！って、そうやって言うことも大事だよ」と返す。他に似たものは「テレビ」。佐藤先生が「番組は？」と聞くと、「ポケモンが見たい」。「ポケモンがあれば大丈夫、そういうものがあることは大事」と瀧川教頭。

ちょうどここで50分間の授業の終了時間になった。一つの質問に対して5〜10分かけ映像を見たり実際にやってみたりしながら回答していき、最後にメモを取る時間を確保する。終始かけ合い形式に進み、教員からの一方通行にならないので、生徒たちはずっと集中し、反応を見せていた。

次の総合的な学習の時間で



7 授業中は要所要所で学んだ内容をワークシートに書き込む時間がとられる。8 パワーポイント教材にはイメージが湧きやすいようイラストなども使われている。

ら机があったけれど、机がない場合もあるよね。それはこれから勉強して、どういこうところが安全か、探してもらいたいと思います。」

防災バッグは

どうして必要？

自分に置き換えて考える

生徒D「なぜ防災バッグを持つていくんですか」

瀧川教頭「みんなは、一日くらい飲んだり食べたりしなくても我慢できますか？一日は我慢できそう？でも、例えば、薬を飲まないで死んじゃう人がいるわけです。人工呼吸器を使うのに電気がないと機械が止まって死んじゃう人もいる。水や食べ物も一日我慢できるかもしれないけど、そういうのを持っていないと死んじゃう人は、防災バッグがあった方がいいですよ。水や食べ物も一日我慢できません、持って行った方がいいですね。熊本の地震で、特別支援学校中部の子が、ずっと車に避難していました。一番困ったのは電気だそうなんです。ゲームができなくなっちゃったんですね。だから、自分で必要なものは

何か、考えておくといいと思います。自分で一つだけ、避難所に持っていきたいものを書いてみましょう。」

考える生徒に佐藤先生が「持っていきたいものは何？」と聞いた。「なくなると困るもの？」とさらに考えて、出て

column 1

居住地校交流のすすめ

長生特別支援学校は海の近くにあり、津波の危険性が高いことから、福祉避難所（※）に指定されていない。市内では、老人ホームなどが福祉避難所として指定されているという。石井浩校長は、「遠方から通学している子どもたちも多いです。子どもたちが地元にいる時に地震があったら、福祉避難所だからと指定された老人ホームに行っても、実際は入居者の対応でいっぱいいっぱいでしょう」と懸念した。

瀧川教頭は、防災のためにも、居住地校交流をすすめていきたいと語る。居住地校交流とは、特別支援学校に在籍する児童生徒が、自身の居住している地域の小・中学校に行き、一緒に活動を行う交流のことだ。また、特別支援学校に在籍しながら、居住地の小・中学校に副次的な籍を持ち、つながりの維持・継続をはかる仕組みを取り入れている自治体もある。「自宅にいてる時に災害にあっても、近くの学校に避難したくても、日常的に行っていないから入りにくいし、行ったとしても居場所がないことがあります。たくさん人が

いるとパニックで大声を出してしまう場合もあって。でも、普段から居住地校交流をして、その子がどういう子かを、クラスの子や学校の教職員がわかっていけば、対応もスムーズにいくと思うんです。本来は、障害があってもなくても、地元の小学校に入っているわけでもそこではその子の教育課程がつくれない、環境がつかれないから、支援学校に来てるんですね。だから、今特別支援学校に在籍しているとしても、地元の小・中学校にその子がいると認識してもらうことが必要だと思うんです。ただ、居住地校交流は、実施率が低いんですね。保護者が希望して、地域の小・中学校が受け入れて、支援学校が送り出す。その三者が揃わないとできないのでなかなか実施が難しいんですが、防災力という点からも居住地校交流は大事だと思えますし、そこから共生社会がすすむような形になれば理想的だなと思っています。」

（※）福祉避難所
主として高齢者、障害者、乳幼児その他の特に配慮を要する者を滞在させることが想定される避難所。



地震の際、自らの身を守る「ダンゴムシ」のポーズを練習。頭を守るのがポイント。

事例 2

車いすの視点からの防災学習

埼玉県立
日高特別支援学校
(埼玉県日高市)

Data

〒350-1223
埼玉県日高市高富59-1
児童生徒数：133名
教職員数：138名
(2019年5月1日現在)



防災学習 interview

元長生特別支援学校
教頭

 龍川 猛さん
に聞く

伝える時は一遍に言わず 身近なことから少しずつ

知的障害のある子どもたちに防災教育をする上で意識していることを、これまで複数の特別支援学校で様々な実践を積み重ねてきた龍川 猛教頭に伺った。

授業の時に気を付けている点は、要素をできるだけ細かく分けて、少しずつ伝えることです。例えば、「下校途中で考えられる事件や事故は何がある？」という問いは広すぎるので、「下校途中でここにはブロック塀がありますね、どんな危険が考えられますか？」というように、少

しずつ考えられるようにしていきます。授業の最初に流した映像も、1回では頭に入らないので、説明しながら2回流しました。子どもたちに避難所を持っていくものを聞いた時、「アイス」と答えた子がいましたが、通常、地震の後に避難所にアイスクリームは持っていきません。でも、



1 生徒の発表にしっかりと耳を傾ける龍川先生。
2 自分たちの日常生活に引きつけた上で学びをまとめていく。

本気で言っているんです。だから、すぐ否定したり訂正したりするのはなく、自分の思うことを伝える、それをちゃんと聴くという環境づくりも大切です。特別支援学校では、防災教育としては訓練一辺倒になってしまい、大人が守ってあげれば良いという方向になりがちです。でも、知的障害のある子どもたちの学級でも、「キャンプ場で考えられる危険なことはなんでしょう」というような質問には、ひとつおりの答えが出てきます。障害があるから学習できないということではなく、少しずつ、じっくり考えていけば、きちんと身につけて判断できるようになる。そこを大人が、忙しいといっていないがしろにしてはいけません。むしろ、「地震がきたらどうしますか」



龍川 猛さん
長生特別支援学校教頭（2017年当時。現在市原特別支援学校教頭）。特別支援学校での防災教育実践を積み重ねる。

ではなく、「地震がきたらこの道のどの部分を通りますか」「道の端だと何かが落ちてくるかもしれないですね」、「ここは車道ではなく歩道だから真ん中を通っていくといいのでは」など、できるだけ具体的に日常生活につなげて、考えていけるようにしていきたいですね。それは、知的障害があるから、特別支援学校だからということではなく、本当はどの学校でも同じことなのではないでしょうか。

事例 2

様々な状況を想定して 一つずつ積み上げた実践

肢体不自由校の防災教育とはどうあるべきか？ 日高特別支援学校は、なかなか参考となる事例と出会えず模索を続ける中で、周囲との協力の輪を徐々に広げてきた。一つひとつのケースを検証しながら、実践を積み上げていく同校の取り組みを取材した。

埼玉県立日高特別支援学校（埼玉県日高市）は、県内西部にある7市4町を通学区域として、肢体不自由のある児童生徒がスクールバスや保護者の送迎により通学している。小学部、中学部、高等部および訪問教育部があり、児童生徒数は約130人、その8割が車椅子利用者だ。

小学部の齋藤朝子教諭は、最初の赴任校である肢体不自由校で、「おかしもーおさない・かけない・しゃべらない・もどらない」を基本とする防災教育に違和感を持った。「車椅子では押し合いにならないし、駆け出すこともできません。それなのに、先生がプラカードを持って『おかしもー』と声を張り上げているのです。現任校で防災担当になると、他の方法があるので

はないか、と思い防災教育に取り組み始めました」

最初は、何をしたらいいかわからなかったという齋藤さん。小学校や知的障害校の事例はあるが、肢体不自由校の事例はなかなか見つからない。それならば自分たちがまとめ、発信しようと考えた。

「車椅子だと、机の下に隠れたり、火災時に身を低くしたりもできません。ではどうするか、自身の学校で何ができるかを、同僚とともに、一つずつ考えていきました」

避難訓練の目的は 自分の身を守るため

避難訓練は学校の実情に応じて実施している。通常の避難訓練を年2回、「シヨート訓練」を年5回、保護者への引き渡し訓練を年1回実施して

いる。

引き渡し訓練は、なかなか時間の作れない保護者の事情を考慮し、3年に一度の参加となるよう調整し、実施日は年度初めには知らせる。車で送迎が多いため、ある年は大雨で敷地内が大渋滞となるなどの混乱も見られた。そのため、訓練では実際に車を回す経路も試す。

「シヨート訓練」は、発災時の初動に重点を置いた抜き打ち訓練だ。一週間の実施期間だけが告知され、いつ開始されるかは知らされない。録音した緊急地震速報の音を放送で流すのが開始の合図だが、授業中に限らず、1日に2回実施されることもある。教職員が2、3人の子どもたちとトイレに行っている時や個別学習などで教室の外に出ている

る休み時間に速報音が鳴り、「一人じゃ安全を確保できない！」「一人足りない！」といった事態も起こりうる。

実際に避難はせず、訓練は数分で終了する。当初はこの訓練のやり方に疑問の声もあったそうだ。しかし、実際に地震が起こった際、子どもたちが落ち着いて身を守る行動ができていたことから、その効果は証明されている。

「継続的な訓練で、自ら身を守る行動を取れるようになってきました。帽子を被ることで苦手な子が自分で防災頭巾を被れるようになったり、先



1 担当ごとに発災時のTo Doをリスト化したアクションカード 2 地震でエアコンが外れ天井からぶら下がっている状態を想定して訓練

生に必要な助けを求めたり。教職員も素早く動けるようになってきています」。

通常の避難訓練では、「アクションカード」を活用すること（図）。発災時、その場でやることをリスト化したA5判のカードだ。各教室に1枚ずつ掲示しているほか、スクールバス、保健など、担当ごとのアクションカードもあり、校内の分掌組織で分担している。訓練のたびに各担当が気づいた点をカードに書き込んでフィードバックし、防災担当者がカードを更新する。

さらに、「指令カード」を使用する。「このドアは開きません」「ここに割れたガラスが散乱しています」など、想定さ

れる状況を書いた紙が開始直前に貼り出される。割れたガラスの上は通れず、覆うためのブルーシートが必要だが、保管場所が共有できていないなど、様々な状況を想定して実践することで初めて気づくことも多かった。

訓練時には、カードに加え、できるだけ具体的な状況をつくる工夫をしているという。

割れたガラスはホームセンターなどで購入できる厚手のビニールシートで模倣し、天井から「エアコン」と書かれた空き箱を紐で吊るすなどした。実際に物が垂れ下がっていると、そこは危険だから通れないと体感できる。

「子どもたちには『どうした

column 2

家庭と連携した 備蓄の取り組み

日高特別支援学校では、備蓄として、各家庭で児童生徒の3回分（1日分）の食事と水分、菜などを詰めた防災袋を用意してもらい、教室で保管している。学校でも2日分の食料を備蓄し、合計で3日分。医療物品が必要だったり、アレルギーがあったりする場合はもう1回分多く用意してもらう（図）。

なれたものや購入が容易なものをお願いしている。毎学期中身を入れ替えてもらうため、必ずしも長期保存が可能なものでなくてもいい。非常食の形にこだわると、いざという時に食べないこともあると分かったからだ。

「非常用の缶詰めパンをあけて食べてみるという学習で、『美味しくないから食べられない』なんてこともありました」

防災袋の中に入れるもの

学校では個別での用意が必要なものを入れる個人用の防災袋を備える。袋は学期ごとに持ち帰り、保護者が中身を用意する。袋の大きさは30×40cm程度



1.非常食（3食分）

スプーンなど/水分（ペットボトルなど）2L分

※各自の食形態に合い、食べられたもの。また、開けてすぐに食べられるもの。

2.毎日の内服薬（3日分）

※1回ずつ小分けにして記名し、「朝」「昼」「夜」など服薬方法をマジックなどで明記/各自の投薬に必要なスプーン・カップ・シリンジ、トロミ剤など

3.衛生用品（オムツ、お尻ふき、タオル、マスクなど）1日分

4.必要によって季節に応じた着替えなど



「いいのか？」を自ら考えられるようになってもらいたい。放課後や休み時間など、車椅子で一人きりになることもありますが、自分の身を守る行動がとれること、自分のニーズを周囲に伝え、必要なサポートを得られること、そして災害を自分事として考えられることが目標です」

日常のなかに 防災学習を織り込む

一般学級では総合的な学習の時間で年3時間、重複学級では特別活動として年2時間の防災学習を行っている。学校のシンボルマークであるかわせみから、「かわせみ防災タイム」と名付けた。

内容は、火災の時の身の守り方について、災害伝言ダイヤルの使い方など様々だ。災害伝言ダイヤルの学習では、NTTの事業所からデモンストラーション用機材（ビッグテレホン）を借りている。受話器の音がスピーカーのため、その場にいる全員が音声を一斉に聞くことができる。

公衆電話を実際を使ってみたこともある。操作しようとする、車椅子から受話器に

は手が届かない。職員が体を抱えて持ち上げると公衆電話のカバー扉が開けられず、これを介助者が頭で支える。最後にコインを入れるのも難しく、「利用するには最低二人は介助に必要だ」と気づいたという。遠方の子どもが多く、すぐに迎えに駆けつけられない状況の中、災害伝言ダイヤルでの安否確認が必要という保護者の声は多い。

このほか、防災シミュレーションゲーム「クロスロード」の学習も行っている。例えば「ショッピングモールで家族と離れた時に火災があった。君は、地下一階にいるとしたらどうする？」という質問に対し、最初は「逃げられないから諦める」と答える子どももいるそうだ。

エレベーターに乗車中に地震が起こったら、という質問では、ボタンを全部押すか、自分の降りる階でしか押さないか、という選択肢を提示。「全部押すとお母さんに怒られる」から「押さない」という回答もあった。

ブロック塀の近くにいる時に地震が起こったら、塀が倒れてくるから道路の方に出る

ようになりまして」。緊急地震速報の音の意味、落ちてくる物を予測し、すぐにその場から離れる、危険な場所はどこか考える癖など、知識と経験を得て自信がつくと、「今週はショート訓練だから、こついう場所は気を付けよう」と下級生に注意を促す子どもも出てきた。

「津波について学んだ時は、僕は走れるけど、車椅子の子は走れないから、高いところに学校がないといけないよね」と、他者のことも考えられるようになってきました」

校内の仕掛けで 防災を日常に

校内の危険な場所を可視化するため、危険な場所に「ぐ



小学部6年生の社会科で「防災に強い町づくり」を考え、模造紙にまとめた。

「継続できる仕組みづくりが課題です。みんなの負担感にならずに続けていければと思っています」

**マニユアルよりも
今一番必要なことを**

いきなり分厚いマニユアルを作ったり、大掛かりなカリキュラムを組み、それを継続したりしていくことは難しい。

かという問いでは、「道路に出ると車にひかれてしまうから危ないので出ない」となる。一人で外出する機会が少ないため、様子を見て大丈夫そうなら道路に出るなどのとっさの判断ができないのだ。

をつけたり、避難訓練を繰り返すことで、子どもたちは変わります。私自身、肢体不自由の子どもは自分で動けないから大人がしっかりと動いて守らなければならない意識だったんです。でも、子どもたちの変化を見の当たりにして、もっと学んでもらおうと考える



「ぐらぐら妖怪」と「みんなの命を守るゾウ」のステッカー。校内の様々なところにこうしたステッカーが貼ってあり、日常的に防災を意識できる仕組みが作られている。

「視察に来られた先生方には、まずは、自校は災害時にどんなリスクが高いかを考えることから始めてはどうか、と提案しています」

例えば、公共交通機関での通学が多い学校では、通学途中、知らない駅で降ろされた時の連絡方法は決まっているか。一度学校に来てもらうのか、家に帰すのか、保護者への引き渡しのルールはどうなっているのか。学校が福祉避

難所に指定されている場合、周辺地域住民を区別せず受け入れるのかどうか、なども話し合っておくとい。

「自校の子どもたちが災害時、どう身を守って、どう避難したらいいのか、どんなことに困るのか、を具体的に考えることからではないかと思えます。そうすれば、自然とそれぞれの学校に合った防災教育の形が出来上がっていくのではないのでしょうか」

様々な防災に関する仕掛け



1 シートをめくると質問の答えが出る
2 授業で作った校内マップを掲示
3 「ぐらぐら妖怪」を探せ!の掲示
4 防火扉を押しやすくするガイドの手形
5 天井に貼ってある「ぐらぐら妖怪」

ビッグテレホン

実際の「災害用伝言ダイヤル171」と同様に伝言の録音と再生が体験できる。各地域を管轄するNTTが防災訓練などでデモンストレーション用に使用している。



地域を巻き込む防災体験プログラムと 福祉避難所設営訓練

地域との交流が少なくないが、特別な支援学校で、つながりを保つためには？
日高特別支援学校の取り組みを齊藤朝子教諭に伺った。

日高特別支援学校では、夏休みに保護者や地域の方と「防災体験プログラム」というイベントを実施している。300人以上が参加し、防災に関する様々な体験をしてみようという意図だ。ボーイスカウトによるロープワークや消防士による煙体験、防災士による防災クイズなど専門家に協力を得て実施している。

「肢体不自由の子どもへの対応は難しい、と思考を止めてしまふのではなく、実際にどうしたらよいかを一緒に考えてもらう機会になればと思います」

特別支援学校は、公立小学校に比べて地域との交流が少なくないが、ちだ。「日頃からこうしたイベントで多くの方々に助けていただくことで、ここに肢体不自由の子たちが通う学校があると知ってもらえるだけでも、

いざという時の対応が全く違ってくると思います」。

イベントと同時に、福祉避難所設営訓練も行う。教職員にとっては避難所設営の訓練、児童生徒や保護者にとっては、車椅子を押して実際に炊き出しを受け取るなど体験の機会となり、避難生活の困難さも知ることが出来る。受付や物品管理など各担当の手順は、役割ごとに分けたアクションカードを使う。毛布が違う担当のいる場所に届いてしまった、というような状況を想定した「指令カード」を用いて実際の対応も試してみる。

「本校は実際に避難所になった経験がないので、想像しきれない部分があります。でも、やってみることで自分事として捉えられます。例えば、『私たちはいつ

家に帰れるのか?』といった疑問も教職員から出てきました。小さなお子さんや高齢者と同居している職員の帰宅を優先するなど、具体的に考えるきっかけになっていると思います」

防災体験プログラムの様子



- 1 非常持ち出し袋の中身を例示
- 2 ハンドバイク体験
- 3 ボーイスカウトによるロープワーク体験
- 4 ユニバーサル防災迷路
- 5 ダンボールブロック
- 6 消火体験

事例 3

視覚障害のある子どもと大人の防災学習

香川県立盲学校
(香川県高松市)

Data

〒760-0013
香川県高松市扇町2-9-12
児童生徒数：17名
教職員数：54名
(2019年5月1日現在)



香川県立盲学校
視覚障害教育支援センター
見えにくさと学びの相談センター

事例3

見えにくさを補う鋭い感覚 五感を研ぎ澄まします防災学習

盲学校として初めて「防災教育チャレンジプラン」(内閣府)に採択されるなど、視覚障害のある子どもたちに対する防災教育で様々な先進的な取り組みを進めた香川県立盲学校。その取り組みの歴史を、牽引役となった元教諭の花崎哲司さんに伺った。

香川県立盲学校(香川県高松市)は、香川県高松市の高松漁港からおよそ250メートル、古い町並みが残る地域にある。19時を過ぎると人通りが絶える住宅地だ。

視覚障害のある子どもたちに対する防災教育の取り組みが少ない中、同校で先進的な実践を重ねてきたのが元教諭の花崎哲司さんだ。花崎さんが防災教育の取り組みを始めるきっかけになったのは、2011年の東日本大震災だ。台風も水害も少ない香川県では、元々防災に対する意識は低かった。震災後、学校の周囲を歩き、その町並みや海の近さを改めて感じた。「今のままでは、津波が来た時に生徒を守ることはできない」と気づき、防災教育に取り組み始めた。



香川県立盲学校周辺の住宅密集地。海からも近く津波の懸念もある。

高松市は南海トラフ地震で大きな被害が出る可能性がある地域だ。南海トラフ地震は、ほぼ100年に一度の頻度で発生しており、1946年に起こった昭和南海地震から、80年以上が過ぎてきている。香川県立盲学校のある地区は、震度6強で液状化の危険が高く、木造家屋が密集しているため、

火災も懸念されている。また、最大津波高は3メートル、最大浸水高は1メートルと予想されている。地区の広域避難場所となっている小学校までは、およそ600メートルだが、浸水とがれきりの中で避難場所まで移動するのは至難の業だ。

同校では、生徒の半数以上が敷地内にある寄宿舎で生活しており、放課後や夜間に災害がおこった場合の対策も必要だった。

花崎さんを中心として取り組み始めた防災教育では、3つの方向からのアプローチを行ってきた。

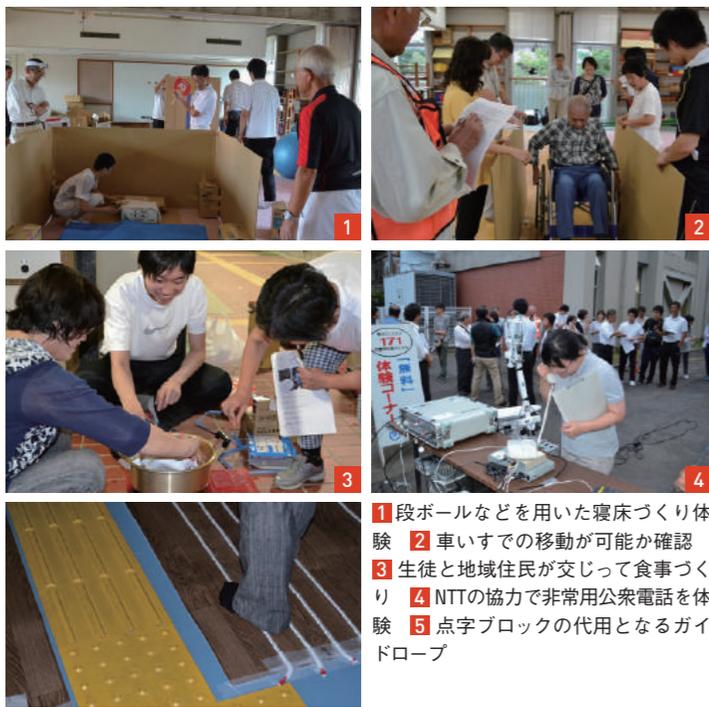
1点目は、社会に出ていく生徒たちが要災害支援者にならないための知識の習得と体験的な学習の推進。「危ないから」と先回りして様々な規

だ。地域住民に、盲学校が近所にあること、どんな生徒が通っているのかを知ってもらい、助け合える体制づくりを進めることだ。

学校で避難所生活を体験 防災合宿で 新たな気づきも

1泊2日を過ごしてみる「防災合宿」だ。2014年に実施された防災合宿は同校の生徒や教職員だけでなく、地元住民なども参加。合宿開始後、はじめに段ボールによる寝床づくりに取り組んだ。段ボールなどの材料や参考になる画像などを学校側で準備した。

1泊2日の防災合宿の様子



1 段ボールなどを用いた寝床づくり体験 2 車いすでの移動が可能な確認 3 生徒と地域住民が交じって食事づくり 4 NTTの協力で非常用公衆電話を体験 5 点字ブロックの代用となるガイドロープ

晴眼者にも有用 ガイドロープ

この合宿で取り組んだもう一つの目玉に「ガイドロープ」の設置がある。ガイドロープは、点字ブロックの代わりに床に敷いて、経路を示す手法だ。寝床から出口や飲料置き場などまでロープを敷き、実際に暗闇の中を、ロープを伝って歩いてみたという。

「分かったのは、ロープの太さが重要だということ。太さ8ミリ以上なければ感触を感じにくく、16ミリ以上だと踏んだ時に痛い。どの太さが適切なかの、経験してみているので分かったことです」

香川大学との共同研究でガイドロープの実証実験を実施。



校内に落下物に見立てた障害物などを設置して、地震発生後の現実的な避難をイメージ。



制をすることで、盲学校の子どもたちは体験不足におちいりがちだった。

2点目は、教職員が子どもたちに何をどう伝えるかを重視して、職員研修を充実させること。専門家による研修を重ねるなどして、まずは教職員自らが体験することをめざした。

3点目は、地域連携の強化

この取り組みは、当時、香川大学で障害者の生活環境を研究していた藤井容子さんと協力して実施した。停電時など暗闇では視覚に頼ることができないため、暗視者にとっても、ガイドロープは有効だ。花崎さんは、校内で牽引役となりこれらのプログラムを進めてきた。しかし、実施に至るまでは、様々な異論が出ていたという。

「真夏の暑い時に、宿泊までする必要があるのか、という声もありました。でも、当時、寄宿舎には11人が暮らしており、昼夜を問わない対応が必要でした。昼は見えても夜は見えないという生徒もいます。視覚障害者には経験が



周辺地域を再現したジオラマで土砂災害を学ぶ生徒たち。触る、嗅ぐ、聴くなど様々な方法で体験。

何より大切ですから。実際に体験して、自分で考えることの意義は計り知れません」

五感を活用した防災学習 見えなくても できることを

同校では、防災合宿以外にも、体験学習を重視し、視覚以外の五感を活用した防災教育を実践してきた。

例えば、近隣地域の地形を再現したジオラマで行う崩落実験だ。14年8月に起こった広島土砂災害を受けて着想したという。

土砂崩れが起きる前後の変化を、ジオラマを触って感じ、土砂災害の仕組みを体験的に学習する。子どもたちは、土砂の臭い、石のこすりあう音、木の裂ける臭いなどを確かめ、「この匂いがしたらすぐ避難だね」「急斜面の家は危ない」など意見を出し合った。過去の土砂災害でも、こうした前兆現象が報告されており、予め体験しておくことで、少しでも早く危険を察知し、避ける力をつけられる。

その他にも、様々なものを実際に燃やし、ものが燃えた時の素材ごとの煙や匂いの違

なっている。

地域との連携も重視 盲学校を地域防災の核に

体験的学習の重視と両輪で取り組んだのが地域連携の強化だ。特別支援学校は、学区が広範にわたり、通学者の居住域が学校付近とは限らない。そのため、地域との連携が十分でないケースも多いが、学校で被災した場合に助けになるのは地域住民だ。一方で、高齢化が進む地域にとっても耐震化された校舎と食料をはじめとした災害用の備蓄がある盲学校と連携することにはメリットがあった。

「県立盲学校は避難所指定

は受けていませんでしたが、地域の方たちに盲学校のことを理解してもらおう良い機会だと考えました」

学校が位置する二番丁地区のコミュニティ協議会などに連携を呼びかけ、13年からは地域住民が学校の防災訓練に参加し始めた。合同訓練を行うことで、「自宅が地区の避難所から遠い人も学校に避難できるのありがたい」、「自分にも子どもたちに対して支援できることがあると分かった」などの声が地域住民から寄せられたという。様々な人と関わることで、子どもたちにも変化が表れた。

「視覚障害のある子どもた

保護者や地域住民も参加する 総合防災訓練



1 消防士の指導の下、全盲生も放水体験 2 保護者と共に消化器体験

五感を用いた防災学習



1 消防署員の見守りの中、校内で煙体験 2 ものが燃えたにおいて、その危険を知る実験 3 押し開けて安全区画に至る防火扉の体験 4 煙の中を歩く生徒たち 5 模型を触ってダンゴムシを体験

いを感じる学習や、消防署の協力を得て、煙の立ち込めた廊下を通過する体験授業などを実施した。

「盲学校に通う子どもたちには、見えにくさを補う鋭い感覚があるんじゃないかと。例えば、人の近づく気配や匂い、音の高さや方向の感覚など、晴眼者以上に鋭い感覚があります。それを、防災に生かせないかと考え、一つひとつ実践していきま

つ実践していきま

した。こうした取り組みは、子どもたちの学習として有効であるだけでなく、教職員にも様々な気づきを与えたという。例えば、煙が充滿した廊下では、子どもたちだけでなく、晴眼の教職員も、防火扉の段差につまずくなど、思ったように動くことができなかった。こうした気づきは、校内の防災体制を見直すきっかけにも

ちは、これまで誰かに何とかしてもらえるまで待つことが当たり前でした。それが前提の減災・防災では、自らの身を守ることはできません。自分で行うことは何かを考える。そのことを通して、自分たちも役立てることがあるかもしれないと気づいてもらえればという気持ちでした」

これらの取り組みを通して、地域防災の課題も見つかった。防災対策としてハード面の整備が進み、災害経験自体が減ることで、災害対応の知恵が失われつつあるということだ。

「近年は、台風などの気象災害も増えていますが、元々災害への意識が希薄なこともあり、大人たちも、台風や地震など自然災害の強大な力と怖さを子どもたちに経験として語ることができなくなっています」(花崎さん)

災害経験を語り継ぎ、地域に根付かせていくこと。盲学校での防災教育実践を進めることで、地域防災への意識が高まっていった花崎さん。2017年に香

川県立盲学校を退職した後、自宅マンション自治会で防災対策の啓発活動をしたり、高松市地域の社会福祉協議会スタッフとして高齢化が進む地区の防災を考える講習会を開くなど、地域防災の取り組みを進めるとともに、国立防災科学研究所の客員研究員として、各地の盲学校で防災科学教室を開いている。



合同防災訓練で視覚障害者への「手引き」訓練を地域住民にも実施。

事例 4

聴覚障害のある 子どもの防災学習

東京都立
立川ろう学校
(東京都立川市)

Data

〒190-0003
東京都立川市栄町1丁目15-7
児童生徒数：171名
教職員数：100名
(2019年5月1日現在)



防災学習 topics

盲学校での実践を元に着想 高齢化する日本社会の防災

香川県立盲学校での取り組みをきっかけに、自身が住む地域の地域防災活動にも取り組む
花崎哲司さん。そこには、多くの共通点があった。

香川県立盲学校を退職した後、地域防災の取り組みを続けてきました。四国地方は高齢化が進んでおり、災害が起こった時に、十分な対応が取れない可能性が高いと感じたからです。

全国に先駆けて高齢が進んでいると言われる香川では、地域の防災体制の見直しが必要だと考えています。例えば、年をとると徐々に、耳が聞こえづらくなったり、目が見えにくくなったり、体を動かしづらくなったりしますよね。いわゆる「災害弱者」と呼ばれる人たちは、障害者だけではありません。地域の高齢者割合が高ければ、避難所の運営なども十分にできないかもしれない。そうした前提の下で考えていかなければならないと思います。



1 住民と共にマンション内の避難はしごの位置を確認 2 マンションの住民を集めて防災の講演会を実施。多くの人が関心を持って集まった。

海辺に建つ築40年のマンションです。400戸以上ある住民の多くが高齢化しています。高松市が指定する避難所までは約600メートルの距離ですが、その付近全域が大災害時の浸水域。避難所まで行くには鉄道高架を越えていかなければならず、災害時に高齢化した住民が自力で避難するのは困難が予想され

ますし、避難所も脆弱です。そこで提唱したのは、倒壊の恐れがなければ自宅にとどまる「避難しない避難」です。住民のみなさんの合意を得るために、防災に関する講演会を定期的に開催し、防災訓練も実施しました。すると、「気にはなっていたけど、何をしていたのか分からなくて」といった声が上がった

のです。自分の身を守るためにできることがあると分かっただけなら、みなさん積極的に動くのだと実感しました。

今では、自治会と管理組合で防災設備を整備し、食料は各戸で実態に応じた備えを呼びかけています。行政の避難所に頼るのではなく、住民自らが自身の住む場所を「ミニ防災拠点化」する。こうした動きが各地域に広がることで、地域の防災力が高まるとともに、コミュニティの再構築にもつながります。こうした取り組みを続けてこられたのは、教員時代に、行政や地域の力も借りながら一つひとつ実践を重ねてきたからです。特別支援学校での防災教育は、子どもたちだけでなく、高齢化社会にも還元できる取り組みだと感じています。



花崎哲司さん

TEAM防災かがわ事務局。国立防災科学研究所災害過程研究部門客員研究員。盲学校を退職後、学校での実践を生かし地域防災に取り組む。

事例 4

「聴こえない」から起こること 普段から備えるために

聴覚障害者が学ぶろう学校で、地域と連携して防災学習の取り組みを進めてきた東京都立立川ろう学校。年間を通して防災学習のカリキュラムの中で子どもたちはどのように変わっていくのか。火災を想定した全校避難訓練の動きを見学し、取り組みを進めてきた副校長にお話を伺った。

東京都立立川ろう学校は、幼稚園、小学部、中学部、高等部から専攻科まで擁する総合学園だ。3歳から20歳まで、聴覚に障害のある171人が学んでいる。

立川ろう学校には、「防災教育推進委員会」が立ち上がっている。委員には、教職員の他、PTAや自治会、市役所警察署の担当者なども入っており、地域ぐるみで防災教育の推進に取り組んでいる。毎年度、年間カリキュラムを定め、月に一度避難訓練を実施する。

全校での避難訓練 継続した取り組みの成果

2019年5月17日、この日は中学部3階の家庭科室で火災が起きたという想定で避難訓練が行われた。火災や地

震など想定する災害は月によって変わり、年間を通して様々なシチュエーションを経験できるように計画されている(表)。

2時間目の授業の真っ最中、10時20分。非常ベルが鳴り、火災の発生が知らされる。

教室には、デジタル教科書などを映し出す大きなモニターがあり、ここに様々な表示が出る。ろう学校ならではの「見える校内放送」と呼ばれるものだ。

このモニターに「火災が発生しました。第1グラウンドに避難してください」と大きく表示され、廊下では非常口の緑の表示の下に、白いランプが点滅する。視覚だけでも非常事態がわかる仕組みだ。同校には、聴覚障害のある

教員もいれば、健聴の教員もいる。

非常時は、耳の聞こえない教員が担当するクラスは、聞こえる教員のクラスに子どもたちとともに移動して、情報共有をスムーズにする。

手話による教員の指示に従って、子どもたちは、ハンカチなどで口を押さえ、ヘルメットや防災頭巾を身につける。ヘルメットには「耳が聞こえません」と書かれた黄色いテープが貼ってある。これは実際の災害時は校外で使用する可能性もあり、聴覚障害があることを周囲の人に分かりやすく伝える工夫だ。

毎月訓練を繰り返している成果が、子どもたちは落ち着いた様子で、整列しグラウンドまで避難していた。小学部の低学年でも、「お・は・し・

口を押さえ、煙を吸わないようにしないと!

も・ち(押さない、走らない、しゃべらない、戻らない、近寄らない)のルールがきちんと徹底されている。

帰宅の方面別集合で 学校外での対応も考慮

グラウンドで集合・点呼が済んだ後は、村野一臣校長から講評があった。手話通訳担当の教員が二人、前に立って通訳する。

小学1年生にとっては初めての避難訓練だったこともあり、校長からは「先生の話をよく聞いて避難しましょう」「火事の際は煙に注意しハンカチで口を押さえましょう」など基本事項が説明された。

前に立つ教員が避難のポイントが書かれたカードを掲げて、視覚的にも理解を促す工夫もされている。

ここまでは学部ごとに集合

していたが、次に、帰宅の方面別に並びを変えて集合しての点呼が始まった。

立川市に位置している同校だが、子どもたちは東京都全域から集まってきた。最寄り駅はJR国立駅だが、通学範囲が広範で、交通手段も様々だ。

「車・徒歩・自転車・国立からバス」「中央線上り」「立川駅乗り換え・南武線・モノレ

ール」など、5つの方面別にそれぞれ分かれて、顔合わせをしてもらう。この「方面別顔合わせ」も今回の訓練の目的の一つ。

「引越などで帰る方向が変わった人はいませんか? 災害が起きた時、何かあった時に一緒に帰るかもしれないメンバーです。顔を覚えておいてください。高等部の皆さんは、後輩たちを守ってあげ

てくださいね」と先生が説明する手話に、子どもたちも真剣なまなざしを向ける。

「災害発生時は、基本的に学校に留まって保護者の迎えを待ちます。基本的には子どもだけで帰ることはないので、お互いに顔が分かっているから何かあった時に声をかけ合い、助け合うことができま



1 各教室の大型モニターに一言に緊急表示がされた 2 すぐに防災頭巾を被り、教員の手話に注目 3 ヘルメットの後ろには「耳が聞こえません」のテープ。 4 講評時にはポイントが書かれたカードを提示 5 帰宅方面別に集合

表 平成31年度 災害訓練実施計画

年度当初	防災体制づくり	災害対策年間計画、非常災害対策組織、災害対策要綱の作成、緊急連絡網の作成、火元責任者確認、避難経路確認、災害時の通動体制、防災用具(消火器、ヘルメット等)の点検 他
4/16(火)	地震避難訓練	地震発生、教室内等での避難
5/17(金)	火災避難訓練	火災発生を確認後避難、放送による避難場所の指示
6/3(月)	地震火災避難訓練 通報連絡訓練 初期消火訓練 消火器訓練	地震発生後の火災発生時の避難、119番の通報要綱、放送設備・消火器の使い方を訓練煙体験、消防関係の車等体験
7/11(水)	地震避難訓練	地震発生、教室内等での避難
9/4(水)	総合防災訓練	学校からの保護者への引き渡し、連絡システムによる伝達訓練、方面別下校体制の確認、下校の確認
10/4(金)	地震避難訓練	地震発生、教室内等での避難
10/4(金)~5(土)	宿泊防災訓練	帰宅困難を想定した宿泊訓練
11/7(木)	火災避難訓練	火災発生を確認後避難(2カ所)、放送による避難場所の指示、逃げ遅れの探索訓練
12/10(火)	地震避難訓練	緊急地震放送発令を想定し、教室等での避難
1/17(金)	火災避難訓練	火災発生を確認後避難、放送による避難場所の指示
2/14(金)	地震避難訓練 防災講演会	地震発生、教室内等での避難、防災に関する講演会
3/11(水)	地震避難訓練	地震発生、教室内等での避難

防災学習 interview

立川ろう学校 副校長
加藤紀彦さん
草間弥生さん
に聞く

卒業後を見据え地域住民と連携 防災をコミュニケーションのきつかけに

立川ろう学校では、2016年度から、地域住民と共に、学校での防災訓練を実施してきた。地域との共同防災訓練を始めるきっかけや経緯について、二人の副校長に伺った。

——地域と連携した防災訓練について、始めた経緯などを教えてください。

——地元自治会との合同防災訓練は昨年度までに4回実施しました。特別支援学校の子どもたちにとって、卒業した後に地域でどうやって生活していくかは大切なテーマです。避難場所所周围の人を助けてあげられるような訓練もしたいと考えて地域防災を始めました。幸いなことに、地域の自治会の方々が防災への取り組みに非常に積極的だったのです。本校には広いグラウンドがありますから、何かあった際に近隣の人たちの一時的な集会所にしたいというニーズもありました。土日に実施されている地域の防災訓練に生徒を連れていくうちに顔見知りになって、つながりができ、合同で訓練をしようという流れができました。

——地域の方々の反応は？

近隣の第二団地という自治会が高齢者の方が多いのですが、はじめに野球部が自治会の防災訓練に参加させてもらった時の印象が良かったようです。野球部は礼節にも厳しいので、きちんと挨拶したり、椅子を持って行って「座ってください」と言ったり。「子どもたちがしっかりと働いて優しくしてくれた」と言ってくださいました。そういう生徒の様子を見てもらって、地域の人たちが喜んでくれたことが、連携強化のきっかけになったように思います。

——これまでの内容を教えてください。

——昨年度は160人ほどが参加しました。炊き出しや三角巾を使った応急手当、ポータブルトイレの組み立てや、体育館でダンボール製の間仕切りの設置訓練

地域との合同防災訓練の様子1



1 野球部の生徒と地域住民が協力して担架を運ぶ。
2 地元消防署の協力を得て起震車体験も実施。

——実施にこぎつけるまでの苦労は？

やはり第1回目がすごく大変で、地域も関わる行事に、学校の水道や電気を使っているのかといった、細かい確認が必要で

した。ただ、東京都の教育委員会からも、「地域の自治会との連携が大事」と打ち出されたので、スムーズに進めることができましたと思います。生徒たちがどう関わりを持つのがベストなのか、地域の方も考えてくださっています。1回目でイメージを作れば、あとは繰り返し自然とアイデアや改善点が出て発展していきます。

——合同防災訓練を通して子どもたちに変化がありましたか。

——子どもたちにとっては、健聴の人たちとコミュニケーションをとる場として、貴重な体験になっていると思います。三角巾を折る、といった簡単な作業でも、コミュニケーションが必要で、一緒に炊き出しをしても、地域の方が手話を使えるわけではないので最初はなかなかコミュニケーションを取れないんです。それでも身振り手振りや筆談でなんとか意思疎通を図る。子どもたちにとっては、それもいい経験になっているようです。家族や教職員以外の外部の方に自分の意思を伝えられるようになってきたと感じます。

——毎年10月には宿泊防災訓練も実施していますね。

——高等部の2年生を対象に3年前から始めました。宿泊はしません。地域住民の方にも参加していただいています。特色としては「暗闇体験」を取り入れています。近づけばなんとか見えるぐらいの灯りはつけますが、電気を消して暗くするので、耳が不自由な子どもたちにとっては目が命なので、やはり暗いということに対して恐怖心があります。例えば料理を作っている時に「危ない！」と声を出しても聞こえませんが、大きく手を振っても気づきにくい。そうした手話が見えにくい、コミュニケーションが取りにくい状況

——訓練の中で、子どもたちにとってどのようなことを指導していますか。

——受け身で待っているのではなく、自分から積極的にコミュニケーションするよう、と日頃から指導しています。聴覚障害がある、聞こえないことを周りに伝えることは、高等部を卒業して仕事に就いてからも必要です。ましてや災害時や避難所では、黙ってわからないままやり過ごすのではなく「何が起こっていますか」と自分から積極的に聞くことが大切です。日本語の力をどう育てるかはその学校、その学校の課題でもありますが、積極的に話しかけること、正しい日本語で話すこと、常にメモ帳を持っておくことは、災害や防災と関係なく普段から指導しています。

子どもたちにとっては、卒業した後に地域で生活していくためのプレ訓練になる。その子の将来像を考えて、貴重な体験の場として指導者がとらえられるといいと思います。特別支援学校といっても障害の種類は様々ですが、その子たちが地域に入っていく時に、「あ、この子知ってる」と思ってもらえることが一番大事。地域の防災訓練などに子どもを連れて行くことからスタートし、少しずつ顔見知りになっていくのがスムーズなのではないのでしょうか。

地域との合同防災訓練の様子2



3 消防士の指導を受けながら子どもたちも放水訓練を実施。4 地域住民と子どもたちが交じり合っ訓練を進める。

——地域との連携強化をこれから始めようとしている学校に、何かアドバイスはありますか。

——お互いに利点があると思うんです。地域のためにもなるし、



加藤紀彦さん
東京都立立川ろう学校幼・小・中学部副校長。



草間みどりさん
東京都立立川ろう学校高等部副校長。

あかはなそえじ先生から メッセージ

だれもが 「助けて」といえる 社会に向けて ——院内学級の現場から

昭和大学病院内学級担当
そえじまさかず
副島賢和さん

昭和大学病院内学級の担当を務め、
ホスピタル・クラウン「あかはなそえじ」として
子どもたちに寄り添い続ける副島賢和さん。
入院している子どもたちの災害時の様子や
多様な子どもたちへの向き合い方について、
社会応援ネットワーク代表の高比良美穂がお話を伺いました。

こんにちは！
「あかはなそえじ」
です



さいかち10

副島先生は病気を抱えた
子どもたちとかがわるときに
大切な心がけを10箇条にまとめている。

- 1 不安の軽減**
子ども自身の不安を軽減させるかわりを行う。
学習に対する不安も見ていく。
- 2 感情の表出**
子どもの感情の発達において、子どもたちの
感情を、特に不快な感情を言語化するようにし、
感情の適切な扱い方を伝えるかわりをする。
- 3 選択の機会**
選択の機会は、自主性や自立性の発達に影響を
与える。学習や遊びの中で、自分で選ぶ体験が
できるかわりをする。
- 4 エネルギーの調整**
子どものエネルギーの違いを感じ取り、教室の
中のエネルギーの偏りを調節する。
- 5 コミュニケーション能力**
友達と一緒に課題に取り組んだり、遊んだり
できるようにかわる。
- 6 呼吸を意識する**
身体の中に滞った空気を吐くことができるよ
うなかわりをする。笑う、歌うなどの活動を
意識してかわる。
- 7 痛みの緩和**
身体の痛みはもちろん、心の痛みを抱えている
子どもを見だし、その痛みを一時でも忘れら
れるようなかわりを行う。
- 8 自尊感情**
自分の身体や能力に何度も裏切られている状
態は、自尊感情を損ないやすい。「自分は自分
のままでもいい」と思えるかわりを行う。
- 9 立ち位置**
教室や病室のどこに立つかという物理的な位
置以上に、子どもたちの目線から物事を理解し
ていくという姿勢が不可欠である。
- 10 Doingの前にBeing**
「何かを行える」「何かができる」ことではなく、
「そこに存在していることだけで価値がある」
ということを伝えるかわりをする。

出典：「あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ ぼくが院内学級の教師として学んだこと」(学研教育みらい) より

障害別の災害対応マニュアル



災害時障害者のためのサイト
NHK
<http://www6.nhk.or.jp/heart-net/special/saigai/>
大災害が発生した時、支援を擁する障害者や高齢者へ
の情報を掲載することを目的としたサイト。「障害別」
の災害対応マニュアルや発災時の心がけを「災害別」
に整理して掲載している。

災害時の障害者への理解を促す



防災のことを考えてみませんか
東京都心身障害者福祉センター
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shinsho/saigai/saigaimanual/>
障害者が自らの命を守るようになるのと同時に、周
囲の方への理解を促すためにマニュアルを作成・掲載。
災害時の初動行動が「障害別」にまとまっている。

シチュエーション別の対応を紹介



地震防災マニュアル
消防庁
https://www.fdma.go.jp/relocation/bousai_manual
「防災地図」に記載された「鉄道」、「地下街」、「学校」
などのシチュエーション別に被災時の対応を確認でき
る。「避難カード」、「非常時持ち出し品チェックシート」
なども用意されている。

専門家視点の情報が満載



そなえる防災
NHK
<https://www.nhk.or.jp/sonae/>
防災に関する最新の研究やメカニズムを解説するコラ
ム、視聴者からの疑問・質問にQ&A形式で専門家が分
かりやすく回答するなど、いざという時に役立つ情報
がまとめられている。

国の防災計画・対策を確認



防災情報のページ
内閣府
<http://www.bousai.go.jp/>
国による防災計画、災害情報や防災対策などを掲載。
「一般」、「企業・団体」、「地方自治体」ごとに避難情報
や避難所運営マニュアル・ガイドラインなどが紹介さ
れている。

防災教育の事例を多数掲載



防災教育チャレンジプラン
防災教育チャレンジプラン実行委員
<http://www.bosai-study.net/top.html>
防災教育に取り組む学校や自治体の応募の中から、採
用になったプランに対し、実践にかかる経費を支給。
実践内容を公表することで、防災教育の場の拡大や質
の向上を目指している。

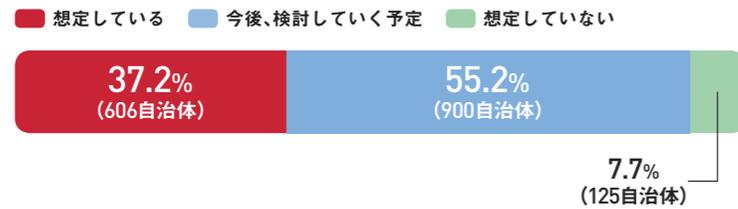
先生たちにお知らせ おすすめウェブサイト

防災情報や防災学習について、
参考になるウェブサイトを紹介し、
授業で子どもたちに紹介するなど、活用してください。

図表1

指定避難所内に高齢者や障がい者、妊婦などの要配慮者の専用スペース(福祉避難スペース)を想定している自治体の割合

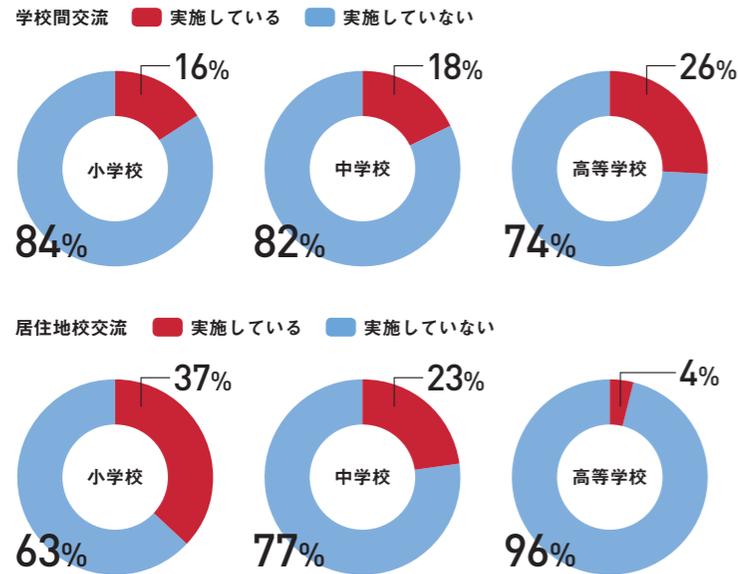
出典:「平成28年度避難所における被災者支援に関する事例等報告書」より(2017年内閣府公表)
全国1,631自治体へのアンケート結果



図表2

特別支援学校との交流および共同学習の実施状況

出典:障害のある児童生徒との交流及び共同学習等実施状況調査結果より(2017年文部科学省公表)



副島 ことはありますか？

副島 病院の中の防災システムはさらに嚴重になりました。一点、私が後悔しているのは、発災後しばらくして情報が欲しくてテレビをつけてしまったことです。津波が押し寄せてくる映像を子どもたちに見せてしまったことを今はすごく反省しています。

また、被災地を訪問した際に、特別支援学校の保護者の方から「なぜすぐに学校を再開してくれなかったの？」と

言われたことがより深く考えるきっかけになりました。

高比良 当時はどの学校も再開するまでに震災から2カ月ぐらいかかり、子どもたちが登校できたのは5月の連休明けでした。

副島 保護者の方から「うちの子は避難所にいられたかった」と言われました。当時、ニュースでも発達障害や精神疾患のある人たちが適応できず暴れてしまい避難所にいらなかった、と報じられました。

たが、病気の子どもも、機械音がしたり、生活リズムが違ふなどの理由から避難所にいらなかったのだそうです。

「1日に1時間でも2時間でも学校が開いていれば、情報交換をしたり、必要な物資をもらったりでできたのではないかと。特に印象に残ったのは、「うちの子は普段から家と特別支援学校を往復しているだけだから」の言葉です。

一方で、「交流及び共同学習」で地元の学校に顔を出していた子は、子ども同士の関係性ができていて避難所にいることができたようなのです。

高比良 千葉県立長生特別支援学校でも普段からの交流が重要だとお聞きしました。

そもそも、防災意識やとっさの判断力というのは、普段の教育の延長線にあるものですよね。また、これまでの取材を通して、結局は普段からコミュニケーションがしっかりとれている地域は安全性が高いということがみえてきました。だからこそインクルーシブの考え方は大事だと思えますし、当事者が声を上げやすくなるような下支えの重要性を実感しています。でも、「自己責任論」が広がる今の社会的な風潮の中、「助けて」という声を上げにくくなっていないでしょうか。だから、障害のある人たちに對して、「周りを含め、様々な人に頼っていいよ」と伝えることや、頼り方を教えることが重要だと思うのです。先生がインタビュー記事や書籍で強調されている「頼っていいんだよ」というメッセージについてお伺いしたいです。

副島 私は、人は強くないか

高比良 院内学級では、災害時などのとっさの対応については、どのような実践をしているのでしょうか？

副島 院内学級の場合、防災対策は病院の方針に則っています。訓練は毎月のようにありますが、子どもたちが自力で逃げるなどの訓練はほとんどありません。病院の電源はすぐ切り替わることもあり、



講演などで全国を飛び回る副島賢和氏。担任を離れた現在もアドバイザーとして昭和大学病院内「さいかち学級」に関わっている。社会応援ネットワーク代表・高比良美穂がお話を伺った。

ある程度安全も確保されていますから基本的には助けが来るまで待機になります。私たちが子どもたちの安全を確保することが前提なのです。

私が担当している院内学級は病棟から離れた場所にあるため、待機の仕方や安否確認などに重点が置かれます。教室があるフロアにはレストラン、会議室などがあり、基本的にはレストランの従業員がそのフロアの情報を収集して中央管理室に持っていくことになっています。場合によっては担当でなくとも近くの病棟の医師や看護師が対応することもあります。

高比良 院内学級独特のルールやノウハウなどはあるのですか？

副島 病院内では、何か起こった場合は職員の指示に従うことが大事で、自発的に動くのは反対にリスクになることが多いのです。「ここには食料も十分あるから大丈夫。電気は止まらないし、いざとなったらヘリが来てくれるからね」と伝え、安心させることが大切です。

高比良 東日本大震災発生時はどうされていましたか？

副島 2人の子どもと一緒に17階の教室にいました。地震が起きた時刻はちょうど授業が終わり、病棟に戻るところでしたが、たまたま仕事が仕上がらない子がいて、もう少しやりたいと残っていたのです。教室は船のように大きく揺れ、ドアはバタバタ開いたり閉まったりして、棚から物も落ちました。すぐに電話で病棟や看護師長と連絡をとり、教室にいる子どもたちの状況を伝え、待機していました。

高比良 あの時想定外のことが続き、多くの人がパニックに近い状態になりました。病気の子どもたちの不安は、はかりしれません。どのようにして過ごされたのですか？

副島 地震直後、教室の窓から、火事で発生した真っ黒い煙が見えて、子どもたちの表情が引きつっていくのが分かりました。揺れがおさまるとすぐに静かな音楽をかけ、「こういう時は人生を考えながら人生ゲームをしよう」とボードゲームやランプをして過ごしました。その場で泣いたり、叫んだりということはありませんでしたが、昭和大学は周辺で一番高い建物だ



つたため、消防士が火事などの確認をするために教室に飛び込んできて物々しい様子でしたので、不安そうでした。エレベーターが復旧し、病室に戻ることができたのは3時間後です。その時はもう限界に近い状態でした。子どもたちの表情が消え、顔色も変わってきて、どうしようかなと思っていたところでした。布団に入った瞬間、大泣きた子どももいたそうです。我慢していたのです。その日は私も病院に泊まり、夜に何回か子どもたちの顔を見に行きました。

高比良 東日本大震災以降、防災に関する意識が変わった

らこそ集団でいるのだと思っています。しかし現代の日本社会では、一人で自立して生きることを良しとする傾向が強いと感じます。支援を受ける人たちに対して「頼っている」と発信することももちろんですが、いわゆる「健常者」でもしんどい時はたくさんあるはず。私自身も教員だったころ、職員室で「助けて」と言えませんでした。

今の子どもたちを見ていて感じるのは、「俺はこんなに頑張っているんだから、お前も甘えるなよ」という自分以外の子どもたちに向けた言外のメッセージです。頑張っている子ほどその傾向があるように思います。そういう気持ちで教室の空気をつくっているように感じるので。

実は、以前は私も教員という立場から、頑張っている子や我慢している子を「すごいね」と一生懸命褒めていました。しかしある時、その子どもたちが冷たくなって、他の子どもたちに寛容でなくなっていることに気が付いたのです。それで、「自分がやってきたことは違ったかな、みんなを助け合えればよかったのに」

と思うようになりました。それが私にとってのターニングポイントです。

高比良 ご自身の病気の経験も関係していますか？

副島 それはとても大きいです。理想の姿ができなくなっただけで、自分との折り合いの付け方が分からなかった頃に、東京学芸大学教授の小林正幸先生に出会いました。その時、「そのままでもいい。あなたがやりたいことをやるように、誰かに手伝ってもらえばいい」と言葉ももらったのですが、私はそれを子どもたちに言うてこなかったなあ、と思います。「歯を食いしばって一人で耐えて、頂をつかむことが最高だ」「この子も頑張っているじゃないか、みんな頑張ろうよ！」という熱血型の先生だったので(笑)。

高比良 褒めることはいいことだ、と親も教員もとにかく「子どもは褒めて育てよう」という風潮もありますからね。

副島 エネルギーがある子どもは競争させられたり、未来を見せられたりしても、それを自分のパワーに変えていきますから、褒めていいと思います。しかし「自分はダメだ」

す。また、看護師が忙しいような場合も気を遣います。だから医療のスタッフには、「押しな時は本当に最後まで思っているってあげてください」とお願いしています。

高比良 誰もが「助けて」と発しやすいた社会にするには、何が必要だと思われませんか？

副島 入院している子どもたちに、「どんな人になったら助けてと言える？」と聞いてみると、話を聞いてくれなさそうな人や忙しそうなお人には伝えづらいようです。

保護者の方によく伝えることですが、低学年の子は自分から気持ちを表現することが難しいです。何かあったと感じたら、大人から「どうしたの？」「何があったの？」など、



そえじまさかず
副島賢和さん

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授、昭和大学病院内学級担当。25年間公立小学校教員として勤務。2006年、昭和大学病院内「さいかち学級」(品川区立清水台小学校病弱・身体虚弱児特別支援学級)担任となる。学校心理士スーパーバイザー。ホスピタル・クラウンとしても活動。ドラマ『赤鼻のセンセイ』(日本テレビ/2009年)のモチーフ。2014年より現職。

ここにいてもいいのかな」といった傷つき方をして、エネルギーが低くなっていく子どもは、褒めるより認めることが大事だと感じています。

高比良 エネルギーが低くなっている子どもたちがパワーを養うためには、大人はどう接するのでしょうか？

副島 例えば子どもが何かできた時、私たちは「偉いね！すごいね！」と言いますが、それだけでは、エネルギーの低い子どもたちは「次にできなかったらどうしよう」と不安になってしまいます。それはパワーにはなりませんよね。それよりも、「できて嬉しいね」「ワクワクするよね」と、その子の心持ちに触れ、気持ちを返してあげることが大事です。すると、またやりたくな

理由を聞いてあげるのがいいと思います。でも、高学年になると、「どうしたの？」「学校で何かされたの？」などと聞かれたらうるさく感じるかもれません。そういう時は見たまま、「なんだか悔しそうなの顔しているね」とか「怒っているみたいだね」と伝えるのです。

高比良 事実のみを言葉にすることで、私はあなたを見ているよ、あなたの変化に気づいているよ、と伝えるのですね。

副島 そうです。そうしたメッセージを子どもに渡した後には我慢です。その後、子どもが自分の部屋から出てきた時に、少しの間、お茶を飲むとか、ゆったり寛いでいる状況をつくってあげるとよいと思います。それだけでおさまる場合もあります。

でも、保護者としては何が良かったかは分からないままで心配なこともあるでしょう。そんな時は「あの時ちょっと悲しそうなお顔をしていたけれど、どうなった？」と過去形で聞いてあげる。その問いかけに対して、話し始めることもあれば、「解決したからも



1 病院や養護施設で過ごす子どもたちに元気を届けるホスピタル・クラウンとしても活動する副島氏 2 昭和大病院内「さいかち学級」の教室。



う大丈夫」と言う子もいます。特に教員は、具合が悪そうなお子を見て過することはなかなかできず、その場で解決しなければと思いがちです。しかし人間関係のトラブルはそんなに簡単に解決できるものでもないでしょう。あなたの悲しさや悔しさは受け取ったよ、何か手伝えることあれば、「助けて」と言ってくれるのを待っているよ、と表明するくらいでいいと思います。

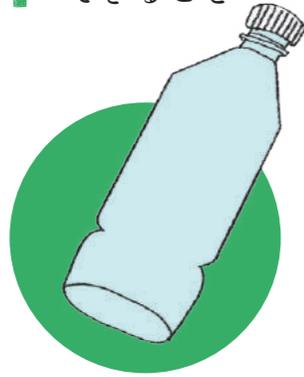
高比良 職場でも同じことが言えると思います。そういう雰囲気や社会全体にも広がる。と、どんなにか良くなるか。

副島 子どもたちから教えてもらったことは、社会で通用することが多いです。

高比良 本当に。子どもたちに教わったことをもっと社会で生かしていきたいですね。

とっさの時、身の回りのものを役立てよう

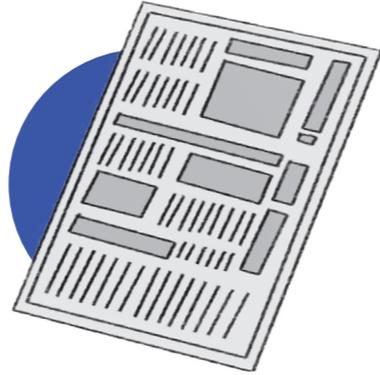
1 ペットボトルで
できること



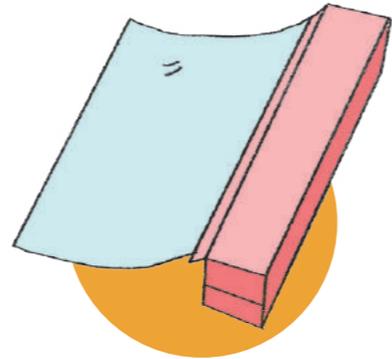
身近なものを
用いて
防災について
考えてみましょう



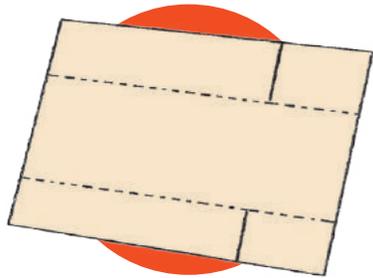
2 新聞紙で
できること



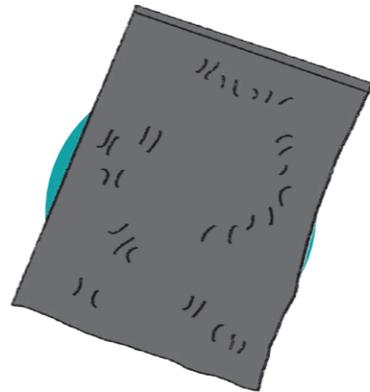
3 ラップで
できること



5 段ボールで
できること



4 ゴミ袋で
できること



防災教育の意義と可能性とは？



防災教育の不思議な力
—子ども・学校・地域を変える
諏訪清二 著
岩波書店
高校教諭として学校現場で長く防災教育プログラムの開発に携わってきた著者による教育論。防災と教育の結びつきと相互作用が生み出す「力」とは？

災害弱者のための「正しい避難のしかた」



津波避難学
清水宣明 著
すびか書房
予測不能な地震・津波対策に関わる中で、災害弱者の視点に立った科学的な「避難学」の必要性を痛感した著者による、誰にでも実行可能な避難方法の解説。

3.11の記録と教訓 障害のある人々のための防災マニュアル



重症児者の
防災ハンドブック 増補版
—3.11を生きぬいた
重い障がいのある子どもたち
田中総一郎・菅井裕行・
武山裕一 編著
クリエイツかもがわ
「医療的ケア」が常時必要な重い障害のある子どもや人々が、3.11をどう生きのびたか。支援の記録と教訓からの災害時の備え、防災マニュアル。

いまは治療に集中 —ほんとうにそうでしょうか？



あかはなぞえじ先生の
ひとりじゃないよ
—ぼくが院内学級の
教師として学んだこと
副島賢和 著
学研教育みらい
多くの不安を抱える入院中の子どもたちに笑顔と自尊心を取り戻すために。子どもとの接し方や保護者との関わり方、教育の重要性などについて語る。

数々の災害支援活動を通じ 心理学者たちがたどりついた結論



災害後の時期に応じた
子どもの心理支援
—被災体験の表現と
分かち合い
防災教育をめぐって
富永良喜ほか 著集
誠信書房
子どもたちに被災体験を表現させる時期や方法など、教育・心理支援のあり方を国際調査やスクールカウンセラーの活動報告とともに提言した集大成。

専門家による 地域防災活動の解説書



第4版
地域防災とまちづくり
—みんなをその気にさせる
災害図上訓練
瀧本浩一 著
イマジン出版
まちづくりと防災を知り尽くした著者が、災害時に想定される危険等を地図上に書き込む「災害図上訓練」や防災マップの作成などから地域の防災力を高める方法を解説する。

防災学習をより深く 理解するためのブックセレクション

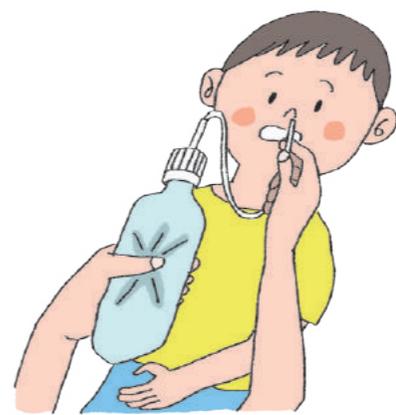
多くの防災関連書籍が発行されている中から、今回事例紹介をした特別支援学校で参考に使ったものをはじめ、おすすめの書籍を紹介します。

とつさの時、身の回りのものを役立てよう

必要な物資が不足した場合、日用品で代用できることもあります。身の回りのものを使った作り方を、材料別に紹介します。

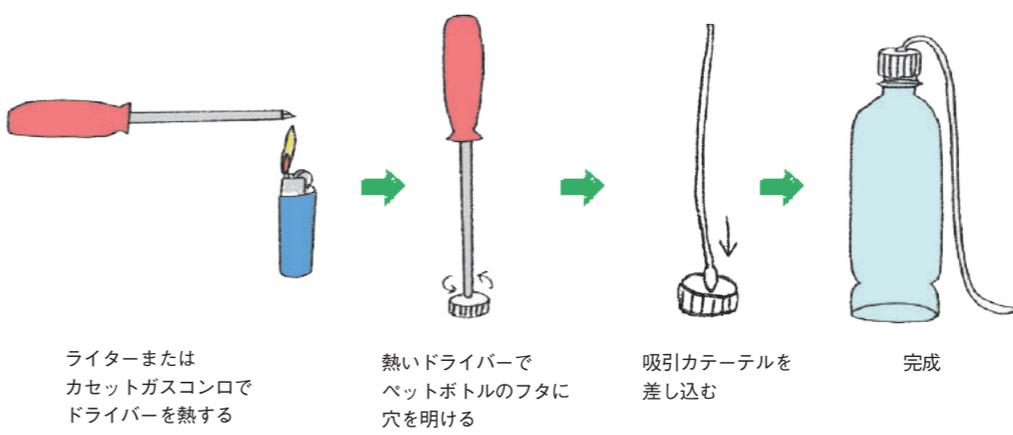


Tool1 簡易吸引器



ペットボトルを凹ませて形が戻る力を利用して痰などを吸引する。連続使用はできないが、一度に5~10秒ほど吸引が持続する。両手で凹ませるぐらいの力が必要なため、2人がかりでやるとよい。停電で電源が確保できないときに役立つ。

準備するもの
500mlペットボトル（フタの内側が二重で、本体が硬めのものがおすすめ）／プラスチックドライバー（直径5mm）／ライターまたはカセットガスコンロ／吸引カテーテル（口腔・鼻腔用）

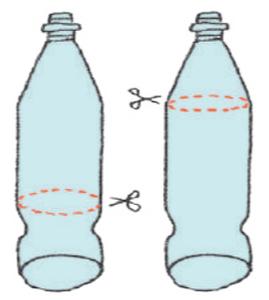


備蓄だけに頼らない 災害時の判断力を磨く

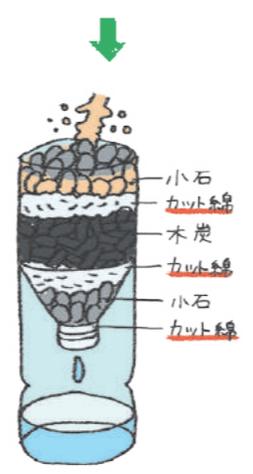
災害が起こる時、備蓄が十分にある学校などにいるとは限りません。そんな時、身の回りにあるものを活用して、避難生活に必要なものを用意することができます。被災後の様々なシチュエーションを想定して、身近なものから必要なものをつくり出す練習をしておくことも防災学習の一つと言えます。

掲載されている他にもいろんな使い方ができるかもしれません。みんなでアイデアを出し合ってみましょう。ただし、一番大切なのは災害時に不慣れた生活にならないよう、できるだけきちんと備えておくことです。忘れないでください。

Tool2 ろ過器

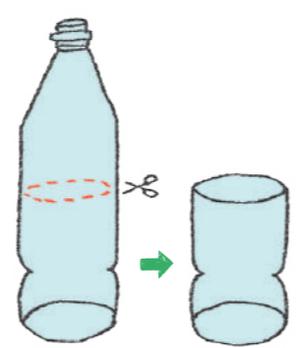


同じサイズのペットボトルを2本用意し、1本は上部を、もう1本は底の部分を切り取る



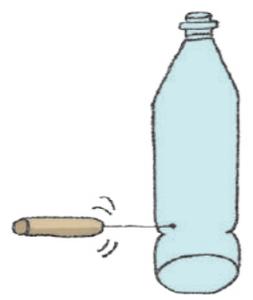
飲み口部分に湿らせたカット綿を詰めて栓をする。その上に材料を図の順番に入れる。材料を入れたペットボトルの飲み口の側を下にしてもう1本の切り口に重ねる

Tool3 コップ



丸いペットボトルの上部を切り取り、切り口を滑らかにする

Tool4 簡易蛇口

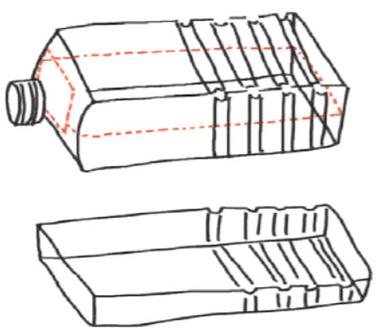


ペットボトルの下の方に直径2~3mmほどの穴をあける



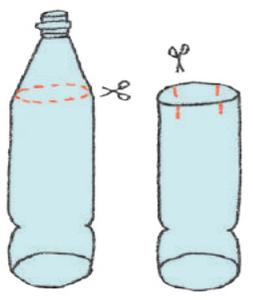
穴を押さえながら水を入れ、キャップをはめる。使う時はキャップをゆるめる

Tool5 お皿



上部を切った後、縦に切ると長方形の皿に

Tool6 明るい照明



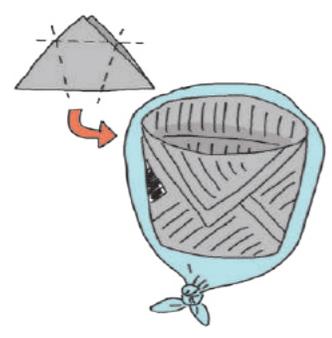
空のペットボトルを切り、切り口に1~2cmの切り込みを4カ所ほど入れる



懐中電灯を立てて入れ、水をいれた別のペットボトルを上から重ねる



Tool 2 食器



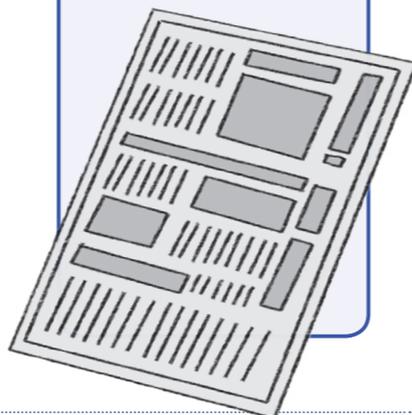
三角形に折ってコップ型にし、袋をかぶせて下を結ぶ

Tool 1 保温する

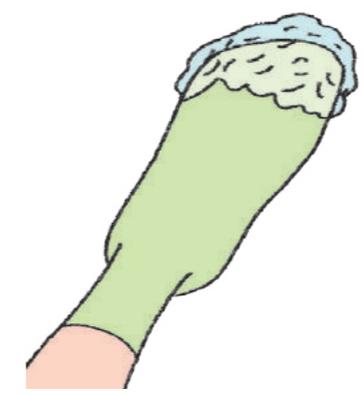


上からラップフィルムを巻くとより保温、断熱効果が高まる

新聞紙で
できること

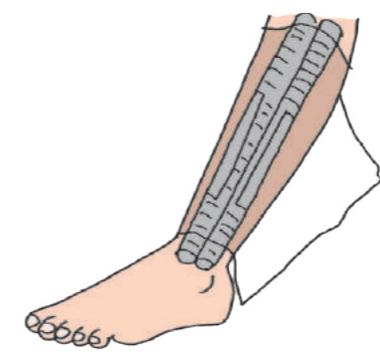


Tool 2 足先の防寒



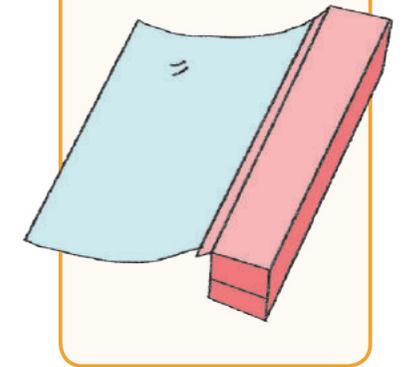
足先に巻きつける。
汚れ防止にもなる

Tool 1 そえ木の固定

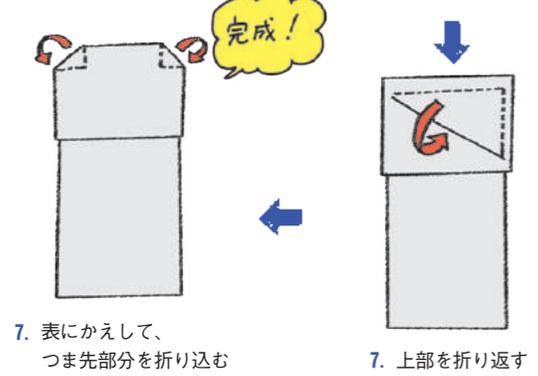
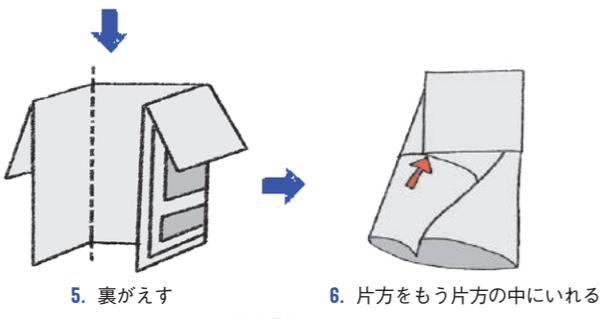
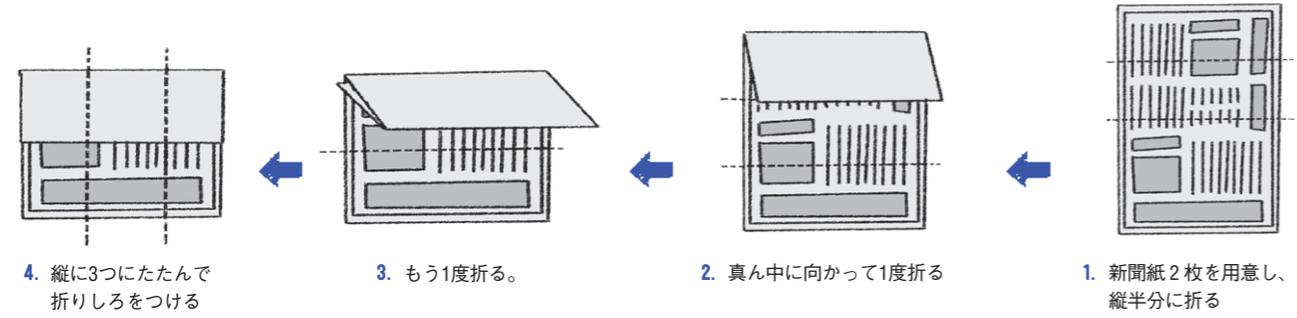


新聞紙を丸めて棒状にし、ラップで固定する

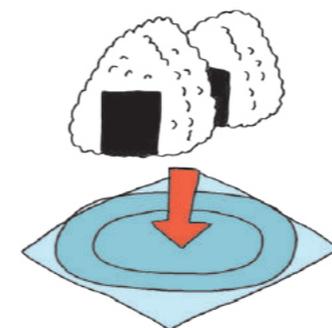
ラップで
できること



Tool 3 スリッパをつくる



Tool 5 食器の節約



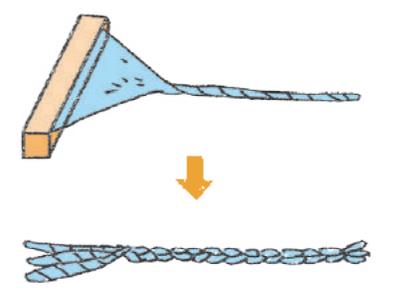
食器にラップを被せて使う。
洗い物が出ず節水になる

Tool 4 傷口の保護



水で洗って巻きつける

Tool 3 ロープ



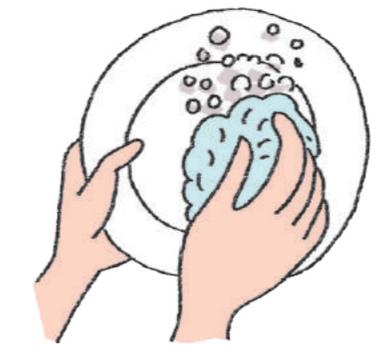
ラップを長く伸ばしてねじる。
それを3本用意し、
三つ編みにするとさらに強度が増す。

Tool 7 即席伝言板



油性ペンで伝言を書いて
壁やガラスなどに貼れば、伝言板になる

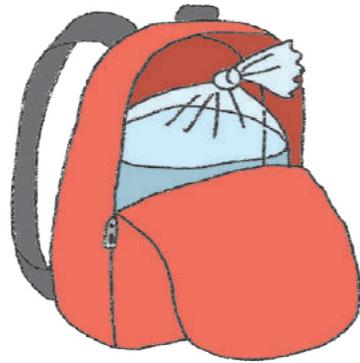
Tool 6 スポンジ



こぶし大くらいに丸めて水と石鹸や洗剤を
含ませれば体や食器を洗うスポンジになる



Tool 3 背負える水タンク

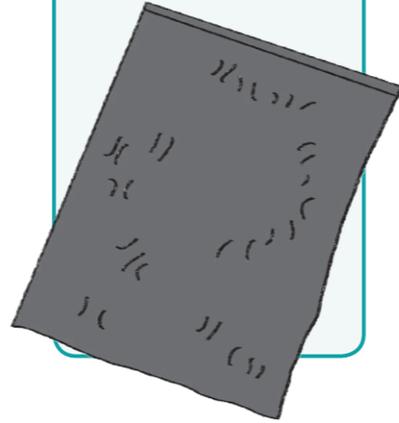


リュックの内側に、二重にした袋を入れる。袋は1枚ずつ縛ると水漏れしにくい

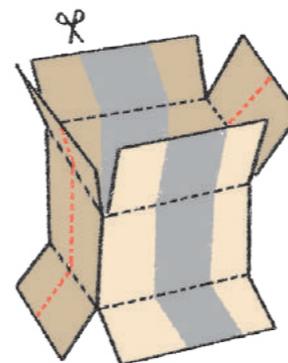


空いた両手で
子どもと手をつないだり
荷物を
持つことができる

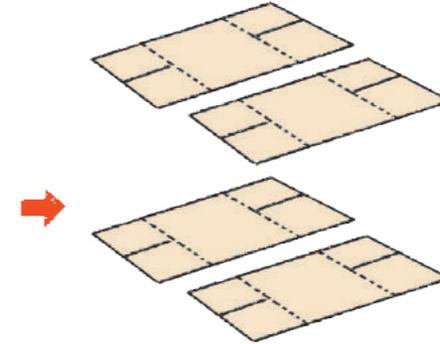
ゴミ袋で
できること



Tool 2 パーテーション

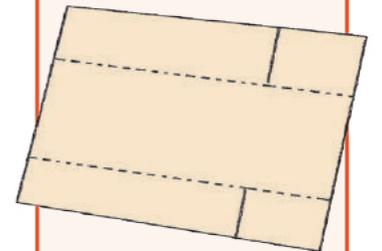


1. 厚手の段ボール箱を開き、角を中心に左右の幅が同じになるように切る

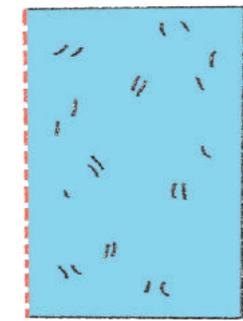


2. 切り取った4つのパーツはパーテーションを支える土台になる

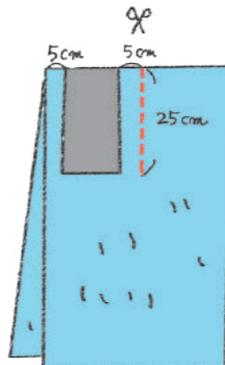
段ボールで
できること



Tool 4 ポンチョ



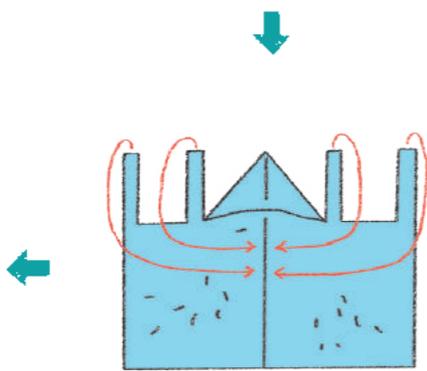
1. ゴミ袋の底を上にして、赤線の部分を切り離す



2. 底の中心から縦に25cmほど切り込みを入れ、黒い部分を切り取る。最後に輪になっているところを切り離す。

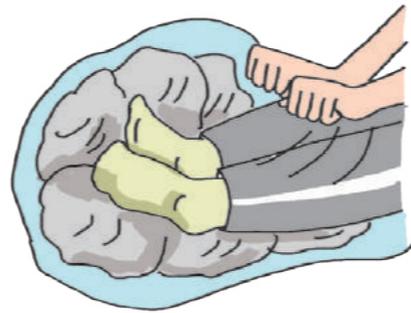


4. 完成



3. 開いて三角部分を頭にかぶって紐を結ぶ

Tool 1 簡易コタツ

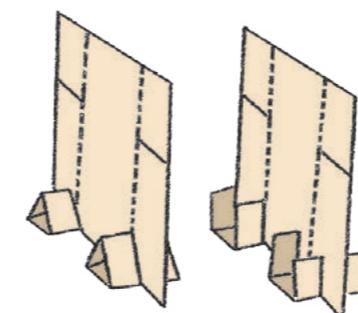


ゴミ袋を丸めて棒状にし、新聞紙を入れて足を入れる

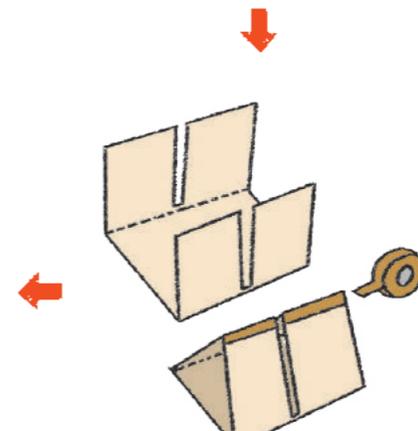
Tool 2 簡易トイレ



バケツにゴミ袋を被せ、中に凝固剤か細かく裂いた新聞紙を入れる

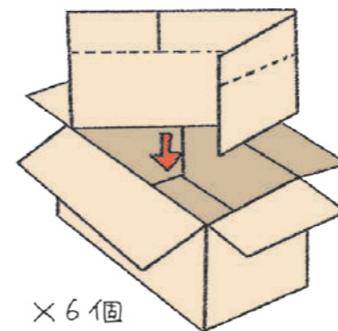


4. 段ボールを土台に差し込む



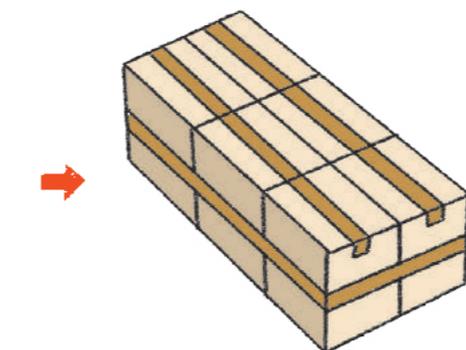
3. 2を三角に組み立て、粘着テープで止める。粘着テープがなければそのまま使う

Tool 3 簡易ベッド

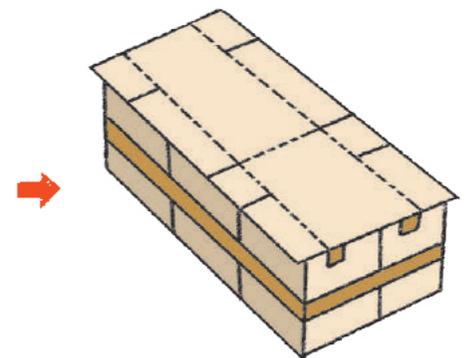


× 6 個

1. 同じ大きさのダンボールを12箱用意する。一つを「く」の字に折り、もうひとつの段ボールに対角線に差し込み、フタをする



2. 1を6箱用意し、ガムテープで連結する



3. 上に段ボールを敷く

Tool 1 床に敷く



床のほこりを吸うことも防げる

Q.3

「福祉避難所」に行きたい・行かせたい
児童やその家族がいる場合はどうすればいいですか？

A 一旦、地域ごとの一般の避難所で受付をし、その後、自治体の担当者判断により、福祉避難所へ移動することが一般的です。しかし、発災からすぐに担当者が避難所を巡回し、1人ひとりに対して、福祉避難所へ移動させるか否かの判断をすることは困難だったという事例もあります。

熊本市では、2016年の熊本地震を受けて、各特別支援学校と協定を結び、「福祉子ども避難所」として、在校生とその家族などが直接避難できる仕組みをつくりました。当時、障害児のいる家族が、様々な事情から避難所にいられず、車中泊などを選んでいたことを踏まえ、普段通っている学校で、災害時の支援が受けら

れるようにしたのです。

しかし、福祉避難所や福祉子ども避難所へ移動したくとも、道路状況や燃料などの問題で、移動手段がなかったという事例もあります。自宅から近い避難所の多くは地域の小中学校であり、普段から要配慮者を含め地域内で交流しておくことが、災害時にも役立ちます。

Q.1

「福祉避難所」とは、なんですか？
「避難所」とは違うのでしょうか。

A 災害が発生した、または発生しそうな時、まずは身の安全を守るため、高台や広いグラウンド、施設などに避難することがあるでしょう。これは、災害の危険から一時的に逃れるための避難場所であり、緊急避難場所と呼ばれます。その後、家が壊れるなどして、戻れなくなった人たちが災害の危険から守り、一時的に滞在させるための施設として開設されるのが避難所です。緊急避難場所と避難所は、相互に兼ねることができます。

避難所の設置には、「被災者等を滞在させるために必要かつ適切な規模」「生活関連物資を被災者等に配布することが可能」「災害による影響が比較的少ない場所にある」「車両などによる輸送が比較的容易な場所にある」などの規程が定められています（災害対策基本法施行令第20条の6）。

このなかに「主として高齢者、障害者、乳幼児その他特にこの配慮を要する者（以下「要配慮者」）を滞在させることが想定されるもの」として、福祉避難所が定義されています。内閣府令（災害対策基本法施行規則第1条の9）で定める基準には、「要配慮者の円滑な利用を確保するための措置が講じられていること」「要配慮者が相談し、又はその助言その他の支援を受けることができる体制が整備されること」「要配慮者を滞在させるために必要な居室が可能な限り確保されること」などとなっています。要配慮者としては、妊娠中の人や、怪我をした人、病気の人なども想定されます。また、要配慮者の家族も含まれます。

一般的な避難所では生活に支障が想定される人たちに配慮するため、設置されるのが福祉避難所です。

Q.2

どんな施設が福祉避難所になるのですか？

A 耐震性が確保されており、土砂災害や水害などの被害を受けにくい場所にあることなど、建物およびその周囲が安全であることがまず求められます。そのうえで、バリアフリー化されている、多目的トイレが設置されているなど、要配慮者が生活しやすい施設が福祉避難所として自治体から指定されます。具体的には、地域の福祉センター、障害者支援施設、特別

支援学校などがあげられます。また、現状において要配慮者の避難が可能な施設のほかに、一般の避難所など、現状では福祉避難所の機能を持っていない、今後整備することを前提に利用可能とする施設も含まれます。

自治体によっては、一般の避難所（学校や公民館等）のなかに、要配慮者のための福祉避難スペースを確保し、支援が受けられるようにしている場合もあります。

Q & A 集

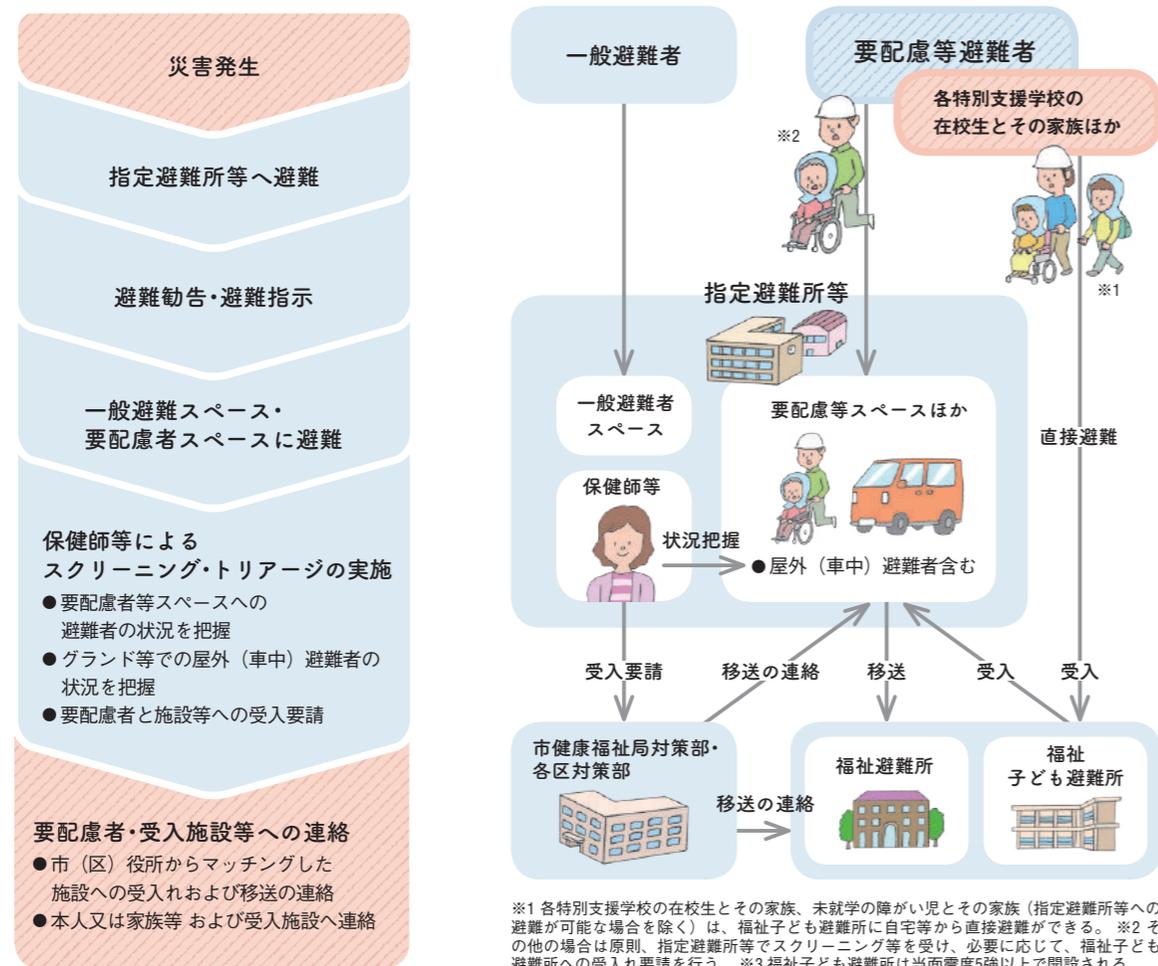
どうすればいい？

高齢者や障害者、乳幼児など、配慮が必要な人が避難所で過ごす際にはさまざまな困難が伴います。近年、そうした人々のために福祉避難所の環境整備が進められています。ここでは福祉避難所について、基本的な知識と各自治体の事例を紹介します。



福祉避難所・福祉子ども避難所フロー図(熊本市の場合)

出典：熊本市「福祉避難所等の設置運営マニュアル」(平成30年8月改定)を元に社会応援ネットワークが作成



※1 各特別支援学校の在校生とその家族、未就学の障がい児とその家族（指定避難所等への避難が可能の場合を除く）は、福祉子ども避難所に自宅等から直接避難ができる。 ※2 その他の場合は原則、指定避難所等でスクリーニング等を受け、必要に応じて、福祉子ども避難所への受入れ要請を行う。 ※3 福祉子ども避難所は当面震度5強以上で開設される

Q.5

勤務している特別支援学校は、避難所に指定されていませんが、「福祉避難所」になる場合がありますのでしょうか。

A 海拔が低い場所にあつて津波が心配される場合や、さまざまな理由から、施設設備が整っていても、福祉避難所に指定されないことがあります。

立地状況や建物に不安がある場合は別ですが、文部科学省は「大規模災害時の学校における避難所運営の協力に関する留意事項について（通知）」（平成29年1月20日）のなかで、「特に特別支援学校においては、障害者が利用するに当たっての配慮も進んでいること等から、福祉避難所になることも想定されます」として

います。東日本大震災の際、避難所に指定されていなかった宮城県の石巻支援学校では、結果的に59日間、避難所として運営されました。地域の方々が、学校が避難所指定されていないことを知らず、次々にやって来る状況のなかで、「避難所ではありません」とは言えなかったという事例もあります。

現状で指定されていなくても、避難所・福祉避難所として運営される可能性があることを想定しておく必要があります。



Q.6

福祉避難所が自分の住む地域のどこにあるのか、何をしてくれるのかなど、あまり知られていないのではなからしょうか。

A 2018年に起きた西日本で豪雨災害では、3県22自治体で「福祉避難所」が開設されました。しかし、そのうち開設していることを公表した自治体は、1つだけだったという調査結果があります（2019年6月6日 NHK NEWS WEB）。

福祉避難所の必要性は認識されているものの、事前指定への取り組みなど、地域によってバラつきがあるのが現状です。

ほかにも、福祉避難所を運営するにあたっての支援者、専門家の確保が不十分であること、自治体の担当者・担当部署との連携が不十分であ

り、運営については施設側の負担が大きいこと、多様なニーズにきめ細かく対応することが災害の状況によっては困難であること、などの課題があります。

福祉避難所では、災害による生活環境の変化によって健康被害などを受けやすい避難者も多く、また、当事者による避難所運営も難しい状況があります。避難が長期にわたることが予想される場合は、施設の人員および自治体の担当者だけでは対応が困難になることも予想され、普段から、活動支援体制などについて取り決めておき、各団体と連携しておくことも必要です。

避難所で子どもが落ち着かなくて



Q.4

福祉避難所に指定された場合、特に施設の整備などの必要があるのでしょうか。

A 自治体は、施設管理者と連携し、該当する施設が福祉避難所として機能するための必要な整備を行うこととなっています。具体的には、段差の解消やスロープの設置など施設のバリアフリー化、情報関連機器の整備などです。在宅酸素療法を必要とする人などを受け入れる場合に備え、非常用電源の確保、器具の洗浄に使用する清潔な水の確保も重要です。また、要配慮者に適正に対応ができるよう、受け入れにあたって、1人当たりの必要面積が自治体によって設定されている場合もあるため、空間の確保が求められます。このほか、授乳のためのスペースなども必要です。

要配慮者の相談を受け、必要な助言・支援をするため、おおむね10人に1人の生活相談員の配置も求められています。生活相談員は、「要配慮者に対して生活支援・心のケア・相談等を行う上で専門的な知識を有する者」とされています（内閣府ガイドライン）。

食糧や生活用品等の物資についても、発災時すぐに輸送される体制が整うことは難しいことから、普段からの備蓄が求められます。

図 就寝場所の他に避難所に設けるべきスペース例

出典：「兵庫県福祉避難所運営・訓練マニュアル」（平成30年3月）

区分	設置場所等
受付場所	● 玄関・入口付近に設置
事務室	● 福祉避難所の運営や災害対策本部との連絡を行うための市町職員等の駐在場所と機器設置
広報場所	● 目のつきやすい場所（就寝場所の近く等）に設置 ● 「広報掲示版」と「伝言板」を分けて設置 ● 情報の種類ごとに整理
会議場所	● 事務室等に福祉避難所運営組織等のミーティングが行える場所を確保
仮眠場所（避難所運営者用）	● 事務室等にスタッフ用の仮眠場所を確保
救護室	● 施設の医務室等を利用
物資等の保管室	● 可能な限り施錠できる部屋や倉庫に保管
食事スペース	● 就寝場所の衛生管理が確保されている場合等は食事スペースの設置不要
更衣室（兼授乳場所）	● 男女別に区分 ● 女性用更衣室は授乳場所も兼ねるため個室を確保（又は仕切り設置） ● 福祉避難所の区分や避難者の状況では設置不要
相談スペース	● 避難者（家族含む）のニーズ調査 ● プライバシーの確保に配慮 ● 個人情報の取扱いに留意
休憩室・交流場所	● 共用の多目的スペース

体調に変化はないですか？



「ストレスマネジメント」の観点。災害時のストレス軽減につながるため、取り組む学校が増えています。が、「何から始めたらいいのかわからない！」との声も聞かれます。そんなリクエストに応じて、ストレスマネジメントの基礎的な内容をご紹介します。



Q.1 防災教育を行う際、子どもたちに不安を与えてしまうのではないかと心配です。

A 新しいことに挑戦するときや、プレッシャーのかかる場面では、心と身体に大きなストレスがかかります。その要因である「ストレス」を把握して対処する「ストレスマネジメント」を行うことで、「ストレス反応」を最小限に抑えることができます。ある学校では、子どもにストレスを感じさせないように、教職員とスクールカウンセラーが協力して避難訓練に取り組んでいます。子どもたちには事前に、避難訓練の必要性和警報などの意味を十分に

説明します。訓練に参加することをためらう子どもには、参加を無理強いないで、子どもが感じているストレスを取り除いてあげることが最優先です。前もって避難経路を散歩がてらに歩いてみるのもよいでしょう。また、事前に予想されるストレス反応と、その緩和に役立つ「リラクゼーション」の方法も教えた上で避難訓練に臨むことも有効です。リラクゼーションとは、心と身体をしずめて気持ちを落ち着かせるリラクゼーション法で、ストレス反応の緩和に効果があります。

Q.2 発災時は普段の生活と大きく異なる状況に置かれ、子どもたちがパニックになるかもしれません。日常からできることは？

A 過去の被災地では、子どもたちが急に泣き出したり、イライラしてけんかをしたりといったストレス反応が多く報告されています。災害による極度の恐怖やストレスで、心に「トラウマ」という傷が残ります。その結果、不眠、不安、動悸、頭痛、吐き気などの「ストレス反応」が起きることがあります。多くの人は時間を経るにつれて自然に反応が治まりますが、自己回復力が追いつかずストレス障害になってしまう場合があります。災害ストレスを解消するためには、「心のケア」と「防災教育」の2つをセットにして行うことが重要です。「心のケア」として、まずは日常ストレスによる心や身体の変調は誰

にでも起こることだと教えます。「ドキドキしたり、泣きそうになったりしても心配いらないよ」と安心させます。トラウマ反応も同様で、時間の経過とともに回復するものと説明します。ストレスに対処するリラクゼーション法を教えると、子どもたちの不安感はさらに減少します。そして、「防災教育」により、防災に関する正しい知識を学び、安心感・安全感を育みます。津波警報を怖がる子どもには「この音は、みんなの命を守ってくれる音だから、怖くないよ」と伝え、警報が鳴ったら、迅速に、遠く、高い場所へ避難すれば命を守ることができることを教えます。警報が恐怖心ではなく安心感をもたらすように意識を変えるのです。

Q.3 日常的に子どもたちに指導できるストレス対処法(リラクゼーション)はありますか？

A 気持ちが沈んでいる時は、頭が垂れ、背中丸まり、肩が内側に閉じていることが多いです。肩は体の中でも心の状態が反映されやすい場所。ほぐすと

気持ちも同時にほぐれます。ここで紹介する「リラクゼーション」は、緊張した体を開放するのに有効です。「セルフリラクゼーション」でも、血圧や呼吸を安定させ、

ストレス反応を軽減できますが、二人で行う「ペアリラクゼーション」は、さらに効果的です。ストレスを感じた時、積極的に繰り返し行くと、効果をより深く体験できます。

セルフリラクゼーション

1. 構えの姿勢

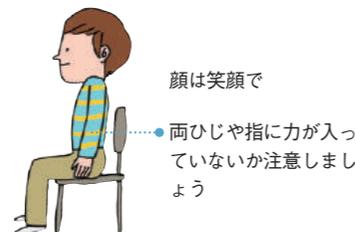
背もたれからこぶし1個分くらい背中を離して、少し浅めに座ります。



一本の糸でつるされているイメージで背筋を伸ばして
両腕は力を抜いて、横に垂らす
腰を反り過ぎないように気を付けましょう

2. 肩を上げる

肩以外は力を入れないように注意して、耳につくくらい肩を上げてみてください。



顔は笑顔で
両ひじや指に力が入っていないか注意しましょう

3. 肩の力を抜く

ストンと肩の力を抜きます。すぐに動かさず、肩の感覚の違いを感じてみましょう。



背中まっすぐのままをキープ

ペアリラクゼーション

前の人

リラックスを体験する人

後ろの人

リラックスを手伝う人



二人でペアになってください。椅子に座っている人がリラックスを体験する人、後ろに立つ人が手伝う人です。

1. 構えの姿勢

前の方は、構えの姿勢。後ろの方は、前の方の肩に手を置いてください。



指先に力を入れたりしないで、優しく手を置きます
後ろの方の手から伝わる温かさを感じましょう

2. 肩を上げる

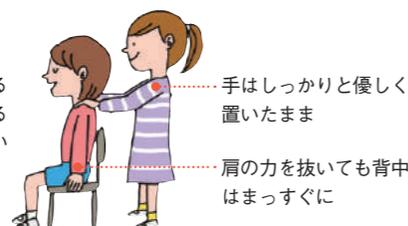
前の方は、後ろの方の温かさや手の重みを感じながら、肩を上げましょう。



前の方が頑張っているのを感じて、応援する気持ちでいてください

3. 肩の力を抜く

後ろの方の手を置いたまま、前の方はストンと肩の力を抜いてみましょう。



手はしっかりと優しく置いたまま
肩の力を抜いても背中まっすぐに

4. 手を離す

後ろの方は、前の方の肩の力が抜ける感じが分かったら、ゆっくり手を離します。



Q.6

災害時、子どもたちの不安が高まり、夜なかなか眠れない場合はどうすれば良いですか？

A 睡眠障害をおこしている可能性もあり、対策が必要です。例えば、昨日は2時間程度しか眠れなかったが、今日は8時間熟睡できた、というのであれば

それほど気にする必要はありません。しかし、眠いのにも眠れない日が続くようなら問題です。

「カフェインを摂らない」、「起床時間を一定にする」など、睡眠障害への

対処法が、「睡眠衛生法」としてまとめられています。まずはこれに取り組み、それでも改善がみられないときは専門医に早めに相談してください。

睡眠衛生法

ぐっすり
ねむるための
10の工夫



1
毎日
同じ時刻に起きる
生活リズムを
整えましょう。



2
以前の
就寝時刻に戻す
以前と就寝時刻が
変わっていませんか？



3
精神活性物質の
摂取をやめる
カフェイン、アルコールなどは睡眠の敵！



4
昼間に
居眠りしない
長時間の居眠りは身体
のリズムを崩します。



5
午前中に
運動をする
身体を目覚めさせま
しょう。



6
夕方以降、
光刺激を避ける
テレビやPCではなく
ラジオや読書を。



7
体温を
上昇させる
就寝間際に熱めのお湯
に浸かりましょう。



8
毎日決まった時間に
食事をとる
就寝間際の食事は睡眠
を妨げます。



9
夕方に
リラクゼーションを行う
瞑想やヨガなどでス
ムーズな入眠を。



10
快眠できる
環境を整える
自分に合った寝具や
照明などを。

出典：Regestein, QR: Sleep Disorders. In Clinical Psychiatry for Medical Students, Stoudemire, A (ed.), p.578, Lippincott, 1990. より岩井圭司 訳

Q.4

被災後、子どもたちに起こりうる反応で、知っておくべきことはありますか？

A ト라우マ体験によるストレス反応とその対応です。例えば、東日本大震災により津波を経験した人の中には、時間が経過しても「津波」という言葉を聞いたり、注意報のサイレンを聞いたりで怖がる人がいます。これは言葉や音が、トラウマ体験となっている津波と結びついてしまうためです。心の健康のためには、あえて避けていることにチャレンジして、条件づけを一つひとつ消していくことが重要です。避け続けていると、かえってトラウマ体験から回復することができなくなってしまう可能性もあります。

まずは、「津波」という言葉や文字自体は、津波そのものとは全く別のものであり、人の命を奪ったり、被害を及ぼしたりするものではないということを理解させます。同様にサイレンについても「命を守る音」と説明すれば、子どもたちはぐっ

と落ち着きます。そうした中で、海の写真や映像などを少しずつ、繰り返し見せることで、トラウマ反応を段階的に弱めていくことができます。また、節目の時期になると、一旦収まっていた反応が再燃することがあります。これを「アニバーサリー反応」と呼びます。子どもたちの中には、反応が出るのを異常なことだと感じたり、心が弱いからだと思ったりしてしまう子もいます。アニバーサリー反応は誰にでも起こりうる反応であることを伝えましょう。

反応を抑えることは、子どもたちがトラウマ体験から回復する妨げになる可能性があります。反応が出ないようにするのはなく、安心して反応を出せるような環境づくりが大事です。普段の様子をよく知り、子どもが信頼している担任を中心に生活指導担当や専門家であるスクールカウンセラーとしっかり連携して取り組むのが望ましいでしょう。



ストマネ topics

心と身体の変化を
和らげる
ストレス対処法

ストレス対処法は、人によって合う方法、合わない方法があります。自分に合った方法を身に付けておきましょう。



1
運動する
運動をして汗をかいたり、趣味に没頭したりして、気分転換するといいよ。音楽を聞いてリラックスするのも効果的だね。



2
問題に立ち向かう
コンテストや試合には練習、テストには勉強、ケンカには仲直りなど、前向きに自分から解決する努力をすると自信がつくよ。



3
深呼吸する
腹式呼吸や深呼吸をすると、気持ちが落ち着いてくるよ。どこでも、一人でできるから覚えておくといいね。



4
原因を考え、ノートに書いてみる
何が悪かったのか、ノートに書きだしてみると、頭の中が整理できるから、解決策が見つかるかもしれないよ。

防災学習 interview

学校防災アドバイザー
湯井恵美子さん
に聞く

学校、保護者、地域で協力し、 長期的視野での防災教育を

自身のお子さんが通学していた特別支援学校でPTA会長になったことをきっかけに、特別支援学校の防災教育に取り組み始めた湯井恵美子さんに、PTAの立場からの取り組みについてお話を伺った。

息子が入学した大阪府立吹田支援学校で、防災の専門家・鍵屋一先生のPTA研修をきっかけに「特別支援学校の防災」を考えるようになりました。「災害時、私たちの子どもは大丈夫？」と心配になったのです。当時、防災教育のカリキュラムをしっかりと組んでいる特別支援学校は周りにありませんでした。計画がなければ単年度の実践にとどまり、個々の先生方の力量に左右されてしまいます。組織的に計画を立てて実施する必要がありました。

そこで考えたのが「学校BCP」です。企業では災害などが起こった時、損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るための計画「BCP（事業継続計画）」を定めています。BCPの学校版を作ることで、現状と

課題が明らかになり、長期的視野で防災教育を実践できると考え、各学校を周って普及活動に取り組んでいます。

災害時の特別支援学校では、まず、子どもたちの命を守ることを考えますが、この時、子どもと先生が共に助かることが大事です。災害時、教職員がケガをしたら子どもたちを守れませんか。例えば、教室は家具が固定されているのに、職員室や校長室はされていない、などの状況の見直しを進めました。

二点目に、できるだけ早く学校再開すること。知的障害の子どもは毎日のルーチンが崩れると、ストレスを感じ薬の量が増えるなどの悪循環があります。子どもたちが一日も早く登校できる状態にするのが重要です。三点目に学校と地域の連携促

進。例えば、足が不自由で指定避難所に行くのが難しい方がいたら、近所の支援学校に避難してもらい、そこで避難所運営を手伝ってもらおう。日頃から訓練しておけば、いざという時、「大丈夫？何か手伝える？」と自然と声をかけ合えるはずですよ。

BCPの普及と同時に、PTAとして子どもを守るためにできる取り組みを進めています。吹田支援学校では子どもの「SOSファイル」を作っています。子どもの身の回りのことや好きなもの、苦手なものなどを詳しく記載した子どもの説明書です。

被災して、子どもたちだけが生き残る可能性もあります。その時に、周りの大人たちに守ってもらうための情報です。また、助けてカード[®]を身に付けてもらっています。名札サ



湯井恵美子さん
防災企業連合関西そなえ隊事務局。PTA活動時の経験から、府立特別支援学校の防災アドバイザーなどとして活動。

特別 interview

パラリンピック
競泳選手
一ノ瀬メイさん
に聞く

世界に通用する競技者になりたい

東京パラリンピックでのメダル獲得をめざす競泳選手の一ノ瀬メイさんに、水泳を始めたきっかけなどを語っていただきました。

——水泳を始めたきっかけは？

両親が近所の障害者スポーツセンターのプールに連れて行ってくれたのが水泳との出会いです。小学3年生の時、当時職員だったパラリンピック競泳日本代表監督の猪飼聡さんに、「世界をめざさないか」と声をかけていただいたのです。大好きな

水泳で海外に行けるのが嬉しく、本格的に競泳を始めました。

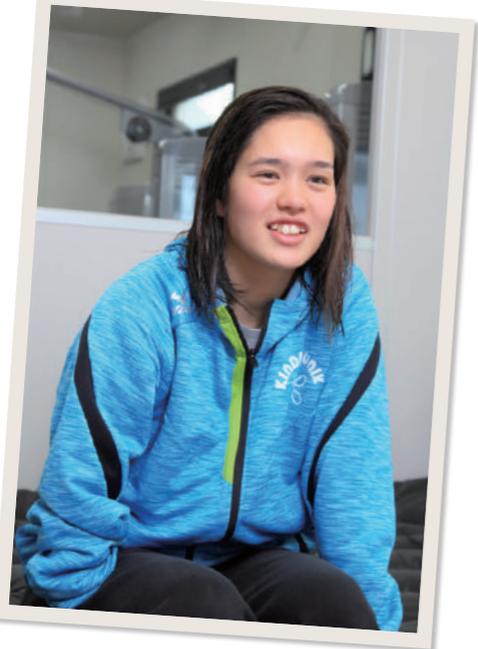
——進路を悩まれたこともあるそうですね。

大学進学の際、興味のある建築学と水泳を両立できる大学が通学圏内に見当たらず、迷っていた時、世界のトップアスリー

トたちを間近に見る機会がありました。母が、私が小学生になつてからイギリスの大学院で学んだこともあり、「勉強は後からでもできるけれど、水泳で世界をめざすのは今しかない」と、競泳に絞ることを決断しました。

——今後の目標を聞かせてください。

2020年東京でのメダル獲得はもちろんですが、パラスポーツが注目されている今は、「障害」について知ってもらうチャンスだと思い、積極的に情報発信をしています。パラリンピックへの関心は高まってきたとはいえ、「障害者」への理解はまだまだ不十分です。例えば、肢体不自由というだけで、泳げるのにスイミングクラブへの入会を断られることもあると聞きます。そんな例が一つでも減らせたら、との思いで活動しています。



一ノ瀬メイさん
1997年生まれ。近畿大学所属。生まれつき右肘から下がない先天性右前腕欠損。リオパラリンピックに出場。

——大学での水泳生活で印象に残っていることは？

水泳を「団体競技」だと考えるようになりましただね。高校までは一人で練習することが多かったこともあり、個人の戦いだと思っていたんです。

リオパラリンピックの代表選考会の時、水上競技部の部員全員がサプライズで駆けつけてくれたんです。毎日、同じ方向を向き、ともに練習に励んできた仲間の声援が大きな力になりました。

最終的には、アスリートとして結果を残すだけでなく、発言や立ち居振舞など人間的な意味でも「世界に通用する競技者」になりたいです。



私たちと一緒に 日本を元気にしませんか？

「社会応援ネットワーク」では、2011年に発生した東日本大震災以降、「心のケア」や「防災教育」といった、防災関連の事業に力を入れています。当団体のホームページ (<http://shakai-ouen.com>) では、『こころのサポート映像集』(11年度発行)、『Q&A方式で学ぶ震災と心のケア』(13年度発行)、『防災手帳』(15年度発行)、『防災教育実践事例集』(17年度発行)などの詳細をはじめ、その他の活動内容もご紹介しております。ぜひご覧ください。



社会応援ネットワークの趣旨に賛同する方なら どなたでも、お申し込みいただけます。

	入会金	年会費
正会員	30,000円	1口 12,000円
賛助会員	なし	個人1口 6,000円 法人1口 50,000円

【入会方法】

●正会員・・・理事会の承認を受ける必要がありますので、下記連絡先までお問い合わせください。
(社会応援ネットワーク) ☎03-6861-3739

●賛助会員・・・以下のお支払い方法に応じて、お手続きください。

①クレジットカードでのお支払い

全国100以上の公益活動団体が利用している「CANPAN決済サービス」にてお手続きが可能です。以下のURLもしくは二次元コードからアクセスし、「申し込む」ボタンをクリックしてください。なお、「CANPAN決済サービス」のご利用には会員登録が必要です。
<https://kessai.canpan.info/org/shakaioen/sustain/102020/>



②郵便振替でのお支払い

郵便局備え付けの払込票をご利用いただき、以下の必要事項をご記入の上、お支払いください。

【必要事項】 記号・番号:00160-2-616804

加入者名:一般社団法人 社会応援ネットワーク

※「通信欄・ご依頼人」欄にご住所、お名前、お電話番号をご記入ください。

記載された内容をもって入会申請内容といたします。

③銀行振込でのお支払い

以下の口座までご送金ください。

恐れ入りますが、振込手数料はご負担ください。

※送金後、以下の入会申請書をご記入の上、必ず当団体までご連絡ください。

【振込先】 ゆうちょ銀行 ○一九(ゼロイチキョウ)店

当座貯金 0616804

一般社団法人社会応援ネットワーク

また、上記③の口座もしくは右記の二次元コードから寄付を受け付けています。寄付金は防災教育教材の製作費など、当団体活動費として活用させていただきます。



声にお応えして、取材してきました！ 特別支援学校の防災教育実践事例です



〈一般社団法人社会応援ネットワーク代表〉
高比良美穂

いつも、ご協力をありがとうございます。

当団体では、2011年の設立以来、「学校現場からの声に徹底してお応えする」方針で、子どもや学校への支援活動を続けています。東日本大震災直後は被災地の子どもや教職員の心のケアが活動の中心でした。災害が多発する中、「防災教育」教材へのご要望が増え、15年度には全国の国公私立小学校に『防災手帳』を、17年度には『防災教育実践事例集』を全国の小中特別支援学校に無料配布するなど、活動の場は全国に広がってきています。その間、声を寄せていただいた学校は800校に及びます。

こうした中で、「はっ」とさせられたのが特別支援学校の教員の方からの質問でした。「防災教育に取り組みたいが障害児・生徒自身の防災意識を促す教材やプログラムはほとんどない。他校はどうしているの?」。商業出版がなかなか取り組めないこうした課題こそ、「学校現場応援」を掲げる私どもが取り組むべきことだと、さっそく取材を始めました。取材機会が少ないこともあり、予定より発行が遅れましたが、ようやくお手元にお届けすることができました。学校での教育活動の一助となれば幸いです。

最後に、事業の趣旨に賛同いただき、製作費をご負担くださった協賛社のみなさま、取材制作にご協力いただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。



【取材協力先】

- 千葉県立長生特別支援学校 ●埼玉県立日高特別支援学校
- 東京都立立川ろう学校 ●大阪府立高槻支援学校
- 昭和大学病院 ●日本放送協会
- 東京都心身障害者福祉センター
- 防災教育チャレンジプラン実行委員 ●総務省消防庁
- 花崎哲司(元香川県立盲学校教諭)
- 副島賢和(昭和大学大学院保健医療学研究科准教授)
- 湯井恵美子(防災企業連合関西そなえ隊事務局)
- 諏訪清二(防災学習アドバイザー・コラボレーター)